

和歌の浦と公園

——明治期の景観保全活動と和歌公園の成立——

On the Establishment of Wakakoen in Wakanoura

米 田 頼 司

Yoritsugu YONEDA

(和歌山大学教育学部)

2010年11月2日受理

〔目次〕

1. はじめに
2. 明治維新と和歌の浦
 - i) 観海閣の再建問題
 - ii) 明治6年の太政官布告(公園設置)と和歌の浦
3. 和歌村々民による和歌の浦の景観保全活動
 - i) 和歌祭の再興
 - ii) 明治18年の公園設置請願
 - iii) 観海閣の修理をめぐる和歌村と和歌山県との応酬
4. 和歌公園の成立
 - i) 和歌公園の設置
 - ii) 和歌公園の指定範囲と経営
 - iii) 和歌公園の公園規則
5. 結語

1. はじめに

和歌の浦は、古来名所として名高い。しかし、和歌の浦がどのような場所であるかを理解しようとするときに、名所というだけでは、必ずしも理解の有効な糸口とはならない。そもそも名所とはなんであるのかが表示され了解されているわけではなく、概念的にはせいぜい歌に詠まれた場所という程度の意味しか持ち得ないからである。名所を“などころ”、即ち名の知れた景勝地と言い換えても、一向に理解は深まらない。やはり景観とは何か、という難問が残る。とくに人々に好まれ大切にされてきた景観とはどのようなものかを、概念的に、従ってまた理論的に明解に説明し尽くすことは、すでに膨大な景観論の蓄積がなされているにも関わらず、今もって困難なことと言わざるを得ないのである。そもそも景観というものを理論的に明解なものとして説明し尽くせるものなのであろうか。私は、概念的・理論的に景観を把握し尽くせるものとし、そのことを前提としたような議論には、近年強い違和感を禁じえないでいる。私は、ここ20数年来、和歌の浦の景観保全をめぐる実際の問題に深く関わるようになってからというもの、常に景観とは何か、それはどのようにして把握され、また如何にして説明可能となる

のか、そのようなことを和歌の浦の現実の景観に即して考えざるを得ないでいる。このような自らに発せられた問い(自問自答)が、いつも頭のどこかにあって、現在では、積年の宿題のような格好にもなっているのである。このような問いに対して私が現在試みているアプローチは、景観を景観として論じるというのではなく、景観を場所が構成される際の基本要素として考えてみようとするもので、言わば場所論という視座を設けて、そこから具体的な経験相に即して景観を把握・理解しようとするものである。この場合には、当然のことながら基点となる場所というものをどのようにして把握し、了解するのかということが問題になる。ここでの私の立場は、場所というものを客観的にも主観的にも単なる空間(一定の広がり)として考えるのではなく、総体的な経験相において現象する人間的・実存的事象として、人間的行為、社会的行為との不可分な関係性において把握し、了解しようとするものである。本稿は、このような立場からの場所としての和歌の浦理解の一環として位置付けられているものである。端的に言えば、和歌の浦とはどういう場所であるのかを歴史的・社会的具体相(諸行為)に即して把握し、了解しようとするものである。議論の焦点になるのは、

明治期における公園設置をめぐる動きである(この点で、本稿は、拙稿「パブリックガーデンとしての和歌の浦」[前号]における議論を引き継ぐものである)。この時期の公園化をめぐるのは、田中正大氏の言説^(註1)があり、一次資料となる『(牡)蠣海苔漁業其他必要書類留：明治5年6月より』(和歌川漁業協同組合蔵)に収録されている資料については藤本清二郎氏による丹念な翻刻があり、また同氏の研究^(註2)がある。本稿における議論は、これらの先行の言説と研究を踏まえつつ、更に歴史的・社会的具體相に分け入ろうとするものである。

2. 明治維新と和歌の浦

和歌の浦の場所としての歴史には、大きな特徴がある。それは、景観の保全が図られ、そのこと自体が一つの歴史になっているということである。神亀元年(724)の行幸の折に聖武天皇が発した異例の詔勅に始まり、近世初期には紀州藩主として入部した徳川頼宣の保全令があり、更には本稿で議論となるように近代以降は、民衆による保全活動が展開されることになる。このような景観保全の歴史が場所としての和歌の浦を特徴づけるものになっているのである。和歌の浦は、古来の名所であり歌枕であるというだけでなく、その保全の歴史からみても、他に類をみないような1000年の景観の地ということになるのである。この和歌の浦の景観保全の歴史は、和歌の浦が万人に開かれた名所であり、景勝地であったことと無関係ではあるまい。和歌の浦が時の権力に囲い込まれることなく、また、私園とされることもなく、パブリックガーデンとして

存在してきたことと、1000年の景観の地としてその景観保全が図られてきたこととは、言わば表裏の関係をなしていると思われる。

さて、本稿における課題であるが、すでに述べたように明治期における公園設置に焦点を絞って和歌の浦の景観保全に関わる歴史的具體相を明らかにすることにある。この場合、まず明治維新によって招来された問題状況をみておく必要がある。幕府と藩の消滅は、近世の景観保全体制の崩壊を意味しているからである。明治維新は、近世の名所・景勝地の存続に危機をもたらすものであった。和歌の浦の場合にも例外ではない。むしろ、万人に開かれた“共楽の地”としてあり、紀州藩によって手厚い保全策が講ぜられていた分、それが崩壊することによって発生する問題状況は、より深刻なものであった。

i) 観海閣の再建問題

幕末期、和歌の浦では明治維新によって藩の保全体制が崩壊した場合に、どのような問題が生じることになるのかを予想させるような事件が発生している。慶応2年(1866)8月7日の暴風雨で観海閣が倒壊するのであるが、万人に開かれた“共楽の地”としての和歌の浦において、観海閣はそのシンボルともいべき存在であり、和歌の浦の景観保全という点で重大事件であった。そして、その再建も異例の仕方で行われた。その顛末が、明治25年に行われた和歌山市の調査(この調査が行われた経緯は後述する)を元にした「再建要領」にまとめられている。やや長文になるが、興味深い内容であり、後述することとも関係しているので、



写真1 観海閣

(写真提供は、溝端佳則氏による)

明治30年代頃に撮影されたと思われる。修理された後であろうか、破損は見られない。

以下では少し詳しくみておきたい。

まず述べられるのは、次のようなことであった。

「慶応二年八月七日、暴風雨ノ為メ建造物破壊ス、然ルニ同所ハ著明ノ勝地ニ属シ、**公衆ノ賞賛尤モ高ク**、拝殿ノ存否ハ大ニ風致ニ関スル而已ナラス、殊ニ旧藩祖頼宣公ノ生母養殊院殿ノ靈囂拝所ニ係ルヲ以而、再建ノ必要頗ル緊急ナルモ、当時海内騒擾、長防証討等、軍事上費金頗ル多岐ニ渉ルヲ以而、拝殿再建等ノ如キハ、藩庫ノ支ヘ得ベカラサル…」(『(牡)蠣海苔漁業其他必要書類留：明治5年6月より』(和歌川漁業協同組合蔵)所収。藤本清二郎 1990 161～162頁。ゴシックと下線は筆者。下線部は、誤ちで観海閣は拝殿と呼称されるが、「養殊院殿ノ靈囂拝所」ではない。)

要するに、観海閣は「公衆ノ賞賛尤モ高ク」しかも「旧藩祖頼宣公ノ生母養殊院殿ノ靈囂拝所」であり、藩が整備する重要な施設として緊急に再建する必要があるが、「長防証討等、軍事上費金頗ル多岐ニ渉」り、藩には観海閣を再建するための財政的ゆとりがない、というのである。そこで考え出されたのが、和歌山城下町人による再建であった^(註3)。

「当時ノ勘定奉行方町奉行室内膳へ前述ノ事情ヲ陳シ、拝殿再建ハ和歌山市民ニ寄附ニ出シメシコトノ内議ヲ遂ケ、町奉行方津田用助ヲ召喚シ、内議ノ旨ヲ論シ、主シテ専ハラ之レガ斡旋ニ従事セシメ、而

シテ棟札ニ列載ノ者ニ建築係リヲ命シ、其事務ヲ担当セシメタリ、茲ニ於而大年寄以下五十三名ノモノニ於テ、先ツ右銀壺貫目ヲ出シ、以テ工事ニ供セリ、然ルニ建築工事ハ百六拾五貫目ヲ要スル見積ナルヲ以テ、猶儘ニ市民ノ寄附金ヲ募リ、慶応二年九月十二日起工シ、越テ三年九月三日竣工ス」(同前 162頁)

藩の施設である観海閣が城下町人によって再建されるというのは、前代未聞のことであつたろう。こうしたことは、観海閣が万人にその利用が認められた“共楽の施設”であつたからで、城下町人も応じることになったものと思われる。こうした異例の事の次第^(註4)は、後述する明治25年～27年における観海閣の修理問題で再発見されることになったのであるが、この折に調査された棟札には、町奉行などに続いて、小池五兵衛以下11名の大年寄の名と村端有兵衛以下37名の御用係(この中には津田伊助という名があるが、上記引用では津田用助となっている)が列記されていた。このことは、観海閣の再建が、特定の御用商人によってではなく、城下町人が総動員され、総参加する体制の下で取り組まれたことを物語っており、工事の資金集めも実際に城下町人から幅広く行われたものと考えられるのである^(註5)。観海閣の部材(恐らくは崩壊後に取り置かれたもの)を使用した記念の杯(写真2—①～④)が残されているが、こうした記念品も資金集めに使われたものと思われる。



写真2—① 観海閣の部材で作られた盃
(個人蔵)



写真2—② 盃の底側
檜の木目がよくでている。観海閣は総檜であつた。



写真2—③ 盃を入れる箱
表に「玉津島図 盃」とある。



写真2—④ 箱蓋の裏面

裏面には、
「以和歌浦観海閣旧
材所作
明治紀元戊辰初冬
之吉
蕙谷可隆識」
とある。「蕙谷可隆」とは岩瀬広隆のこと。

かくて、慶応2年に発生した観海閣の再建問題とその顛末は、“共楽の地”として和歌の浦の場所性に応じた形で解決されたこと、即ち、和歌の浦の景観保全の歴史に是非とも書き加えられねばならない特筆されるべき事績であったことを物語っている。しかし、明治維新时期という歴史的な文脈においては、むしろその後の藩の消滅によってもたらされる困難な事態の予兆として考えられねばならないものであった。

ii) 明治6年の太政官布告(公園設置)と和歌の浦

先にも触れたように、明治維新の中で幕府と藩によって設けられていた景観の保護・管理体制は崩壊する。明治4年(1871)の廃藩置県で藩は消滅するのであるが、このことは言うまでもなく、その一方で藩による景観の保護・管理体制に替わるべきものが早急に用意されねばならないということをも意味していた。幕府や藩が保護・管理していた景勝地はその多くが上地され、新政府の管理下に置かれることになるが、その保全と管理に明確な方針は確立されていなかった。そのために無原則な払い下げや放置による荒廃が進むことになる(大浦由美 1998)。このような問題状況に歯止めを掛けるべく、地租改正という懸案と抱き合わせに公布されたのが明治6年(1873)の太政官布告であった^(註6)。条文は以下の通りである。

「三府ヲ始、人民輻輳ノ地ニシテ古来ノ勝区名人ノ旧跡等、是迄群集遊観ノ場所(東京ニ於テハ金龍山浅草寺、東叡山寛永寺境内ノ類、京都ニ於テハ八坂社、清水ノ境内、嵐山ノ類、総テ社寺境内除地或ハ公有地ノ類)従前高外除地ニ属セル分ハ永ク万人偕楽ノ地トシ、公園ト相定メ被ル可キニ付、府県ニ於テ右地所ヲ択ヒ、其景況巨細取調べ図面相添、大蔵省ヘ伺出ズ可キ事。

明治六年一月十五日 太政官

(田中正大 1974 48頁に掲載されていたものから引用)

この布告で景勝地の保全と活用のための公園設置が制度化されることになるのであるが、条文にある「永ク万人偕楽ノ地トシ」というフレーズは、前号で見た“共楽の系譜”(万人のための遊息地が公的につくられてきた系譜)に連なるものであることを示しているであろう。この布告に応じて、明治6年には、東京に飛鳥山、上野、芝、浅草、深川の5公園が設置され、それ以外にも厳島(広島)、軺(広島)、住吉(大阪)、浜寺(大阪)、高知(高知)、長崎(長崎)、新潟(新潟)、馬場(宇都宮)、鋸山(千葉)、高山(高山)、佐氏泉(米沢)、日和山(酒田)、千歳山(山形、滝山村)、東山(岡山)、白杵(白杵)の15公園が設置されている。佐藤昌氏は、このような太政官布告に基づく公園は、明治20年までに67ヶ所を数えるとしている(佐藤昌 1977 94~95頁)。

拙稿「パブリックガーデンとしての和歌の浦」(前号)

で検討したように、“共楽の系譜”は徳川頼宣(和歌の浦)―徳川吉宗(飛鳥山など)―松平定信(南湖)というように辿ることができるものとすれば、その起点に置かれる和歌の浦こそは、この太政官布告による最初の公園に指定されるべきところであった^(註7)。しかし、和歌の浦における太政官布告に基づく公園設置は、難航し、遅れる^(註8)。和歌の浦に公園(和歌公園)が設置されるのは、明治28年(1895)のことである。この間、和歌山県は、明治16年(1883)と明治23年(1890)に太政官布告に基づく公園設置を稟請(申請)しているが、いずれも却下されている。明治27年の稟請がようやく認められて、翌年28年に設置されたのが和歌公園ということになる(「和歌公園沿革」〔和歌山県庁蔵〕)。この和歌公園設置に関わる事態は、後述するとして、ここで確認されるべきは、明治維新时期から和歌公園が設置されるまでのおよそ30年間、藩の保護・管理体制を離れた和歌の浦は、新政府のもとでは制度的な保護策を受けることなく、放置され、荒廃が進行したということである。

3. 和歌村々民による和歌の浦の景観保全活動

藩の消滅後、和歌の浦では荒廃が進むことになるが、和歌村々民はこれを座視することはなかった。この和歌村々民による和歌の浦の景観の保護と管理に関わる活動は、近代以降の景観の保全体制を考える場合に、特筆されねばならないものである。以下に見るように、明治初期~20年代において展開される和歌村及び村民の景観保全活動は、日光の保見会の設立時期(明治12年〔1879〕)や京都の保勝会の設立時期(明治14年〔1881〕)と重なるが^(註9)、民衆による景勝地の景観保全活動という点では、先駆をなすものであったと思われる^(註10)。まだ十分な調査ができていないので断定はできないが、和歌の浦のケースは、グラスルーツで成立した地域における景観保全活動の展開としては、恐らくは最も早いものであったろう。

i) 和歌祭の再興

まず、目を止めておきたいのは、和歌村々民による和歌の浦の景観保全活動と並行し、あるいは連動したものと考えられる和歌祭の再興についてである。和歌祭は、紀州東照宮の例祭で藩が主催するものであったが、近世を通じて広く知られた祭礼で、民衆の練物が主役になる風流(芸能)の大祭であった。この和歌の浦で創始され、育まれた祭礼は、藩なき後、2年の中断を経て、和歌村々民によって再興されるのである。明治7年(1874)のことであった。旧紀州藩士は、この和歌村人民の「偉業」に感激し、明治18年(1885)には徳盛社を結成して、和歌祭の開催を財政面から支援することになる。そして、和歌村々民によって再開された和歌祭は、明治20年代には大祭として復興し、明治30

年代には「日本三大祭の一つ」と称されるようになる(米田頼司 2010)。大正14年(1925)に編纂された『海草郡誌』が伝えるところによれば、明治13年(1880)に上地されていた御旅所が東照宮境内に戻されている。

「(六月)五日 和歌村県社東照宮旅所官有地一町四段五畝二十二歩ヲ民有地第一種地籍ニ編入ス、蓋シ該村民ノ請ヲ充スナリ」(和歌山市史編纂委員会編纂 1978 410頁)

祭礼(渡御)の挙行には御旅所は不可欠なものであったが、上地されていたものを和歌村々民は、東照宮に戻すことを要求し、それを認めさせていたのである。

このような和歌村々民による和歌祭の再興は、和歌の浦の景観保全を求める活動と並行したものと考えられるのである(米田頼司 2010)。

ii) 明治18年の公園設置請願

和歌の浦の景観を保全するための和歌村(村民)の活動が明瞭な形で現われているのが、明治18年に和歌山県知事に宛てられた公園設置の請願書である。すでに触れたように、和歌の浦における公園設置については、明治16年(1883)に和歌山県から国に稟請書が提出されているが、却下されている。明治18年に和歌村から和歌山県知事宛てに提出された請願書は、恐らくは県が国に提出した明治16年の稟請書が却下されたことに対応してのものであったと思われる。

それでは、明治18年に和歌村が県に提出した請願とは、どのような内容のものであったのか。和歌村々民による和歌の浦の景観保全活動の内実をみる上で重要なものとなるので、以下では詳しくその内容を見ておくことにしたい。

請願書の内容は三つの構成部分から成り立っている。まず初めに述べられるのは、神亀元年の聖武天皇の行幸に始まる和歌の浦の景勝地としての由緒来歴で、次のように締めくくられる。

「徳川氏封ニ就クノ以テ土工ヲ怠ラサル事二百五十年、故ニ江湾浚ク、堤防鞏ク、祠宇燦爛、殿塔・輪奐海樓波ニ臨ミ、石虹水ニ俯シ、巖角沙嘴、翠松碧波ニ掩映シ、風光神亀ノ旧ニ似スト雖、尚千載ノ名区タルニ負カス、保勝ノ事至ルト謂フヘシ」(『(牡)蠣海苔漁業其他必要書類留：明治5年6月より』(和歌川漁業協同組合蔵)所収、藤本清二郎 1990 155頁)

以上のように述べられた上で、明治になり和歌の浦が荒廃し、放置できない現状になっていることが、言葉を重ねて訴えられる。

「明治中興ノ後、旧慣ヲ破リ、社寺ノ碌ヲ削減シ、土木ノ方ヲ創定セラレ、浦上ノ事遽ニ和歌一村ノ支弁ニ帰シ、祠宇僧坊壊廢シテ修ムル能ハス、石欄断橋頽廢シテ理ムル能ハス、岸崩レ、渚荒レ、華表荒叢ノ中ニ立チ、古堂諸圃ノ間ニノ遺リ、神祠ノ名空シク、佩玉ノ餘響ヲ留メ、曲浦ノ松徒琴瑟ノ遺音ヲ

存シ、聖上愛賞ノ勝ヲ挙ケテ、以テ漁翁蠶婦ニ属シ、荒涼ノ状人ヲシテ帳然ニ堪ヘサラシムハ、若シ今日ノ如ク浦上土工ノ事ヲ以テ、土民カ採藻捕魚ノ余資ニ任センカ、其頽廢年ト興ニ加ハリ、千載ノ勝地、海内ノ名区遂ニ蘆白蓼紅ノ荒叢タラントス、豈嘆惜ノ至ナラスヤ」(同前)

徳川期を述べた前段と合わせて読めば明治政府批判ともとれる内容である。廃藩置県後10数年を経て和歌の浦の荒廃は、相当に深刻化していたということであろう。

次の段では、いわば結論として、和歌の浦を公園として保全・整備する必要を陳述し訴える。まず、

「所聞ニ拠レハ、近來保勝ノ議漸ク盛ニシテ、政府ハ特ニ資金ヲ地方ニ給シ、以テ古社寺ノ保存ヲ図リ、府県会ハ地方税ヲ以テ名区ヲ公園トナシ、以テ四民遊息ノ地トナス者一ニシテ足タスト、実ニ明世ノ盛挙ト称スヘキナリ、」(同前)

として、「四民遊息ノ地」となる公園の設置の動きに期待をよせ、歓迎するところから始め、

「我明光浦ノ如キ和歌山ヲ距ル僅ニ一里、道路平ニシテ砥ノ如ク、車駆ルヘク、馬馳スヘシ、而シテ天然江山ノ美今他邦ノ勝ニ譲ラス、県下秀靈ノ地ナキニシモアラスト雖、其特ニ公園ト定ムヘキ者、蓋我明光浦ヲ除キテ他ニ求ムヘカラサルヲ信ス」

として、和歌の浦が公園適地であることを述べる。そして、適切な保全と整備が施されれば、「**四民遊息ノ勝区頼テ以テ成リ**、江水山月モ亦頼テ以テ更ニ一層ノ明光ヲ添フヘキナリ」(ゴシックは筆者)とし、最後を「特に本県公園ト定メラレン事村会ノ評決ヲ以テ、此段奉請願候也」(同前)と締めくくっている。

以上のような請願書には、公園地となるべき場所(区域)が列举された書面が添付されており、設置されるべき公園区域が示めされている(後掲資料1)。これで見ると、設置されるべき公園は、妹背山・玉津島、東照宮・天満宮(下馬と御手洗池を含む)、秋葉大権現・羅漢寺、海岸部の「空き地」の分散した四つの地区から成り立つものになっており、とくに妹背山・玉津島と東照宮・天満宮(下馬と御手洗池を含む)が核になるものであったとみることができる。とすれば、核となるべき妹背山・玉津島と東照宮・天満宮(下馬と御手洗池を含む)は、藩政期に巡礼等の人々が訪れてくる場所と一致しており、藩政期における“共楽の地”としての和歌の浦の姿を藩なきあとにも維持し、再現しようとしたものであったということになる。

ところで、明治16年の公園設置稟請が却下された理由の一つは、近世期に日光の場合には山内から民家が排除されたのに対し、和歌の浦の場合には民家も生活の場も許容されるようになっていたことから、地盤が国有地となる営造物公園を設置しようとする場合、どうしても散在型にならざるを得ない、ということがあ

ったものと思われる。散在型は公園としての管理運営に問題ありということであったと思われるのであるが、和歌村が請願書に添付した公園区域一覧(後掲資料1)では、妹背山・玉津島地区には私有地を加えて、面的に連続性が確保されるように配慮がなされていることが窺える(とすれば、こうしたところにも、村[村民]の公園設置に向けての強い思いを読み取ることができる)。

しかし、この請願は、明治18年10月19日付で、「過日、当村公園地設置願之義、聊カ都合之品有之候付、至急御下戻相成度、此段上願候也」という「願」が村長から知事宛てに提出された後、日ならずして村自身によって取り下げられている。そこにはどのような事情があったのであろうか。内容的に政府批判と受け取られるところがあり、県からの取下げ要請があったのかもしれないが、恐らくは、「私有地」が入れられていたことと関係しているものと思われる。例えば、公園地は私有地ではなく、公有地であること(営造物公園としての設置条件)が求められたことから県(郡)より取り下げようにとの指導があった、あるいは、私有地の所有者が将来的に寄贈を求められる可能性があることに対してそれを拒否した、更には、私有地を含むことで、他の村民から特定の者に利益を与えることになるというクレームが付いた、などの事情が考えられる。

いずれにせよ、明治23年にも県から国に稟請書が提出されていることから、この至急の取下げは和歌村(村民)が公園設置そのものを断念したことを意味するものではなかったと見てよいであろう。ただ、すでに触れたように明治23年の公園設置の稟請も認められず、和歌の浦における公園設置は難航する。しかし、明治25年(1892)に転機が訪れる。

iii) 観海閣の修理をめぐる和歌村と和歌山県との応酬

そもそも和歌村(村民)が望んだのは、藩なき後の和歌の浦の荒廃を食い止め、藩政期のような公的な保全・維持の体制が作られることであったが、そのための公園設置が認められなかったために、和歌の浦の荒廃は進むことになったのである。とくに度々訪れる暴風雨でその都度少なからぬ被害が出ていたものと思われる。先述のように県から国に宛てた公園設置の稟請書は明治16年に続いて明治23年にも提出されているが、それぞれの前年はいずれも風水害に見舞われている。とくに明治22年(1889)の風水害については、被害の大きさが明治42年(1909)頃に作成された『和歌浦町誌』に次のように書き記されている。

「七月十七日全年九月二十日の両回は未曾有の暴風雨にして河水氾濫人家を浸し実に当地有史以来の悲境に陥り為めに海苔養殖地は流出土砂堆積して著しく埋没せられ稀有の凶作にして当地町民の生活上に多大の影響を来せり。」

明治27年(1874)の稟請によってようやく公園設置が国に認められることになるが、この稟請に先だって明治24年(1891)にもやはり暴風雨による被害があった。この折の暴風雨では、とくに観海閣の損壊が進んだようで、放置できない状況にたち至っていたものと思われる。

この折の観海閣の破損にたいする修理をめぐる、明治25年5月9日～明治27年1月27日に和歌村と和歌山県との間で応酬が展開されることになる。この帰趨が和歌公園設置へと事態を大きく打開することになるのである。この応酬とその決着は、『(牡)蠣海苔漁業其他必要書類留：明治5年6月より』(和歌川漁業協同組合蔵)所収の文書を読み解いて行くことで明らかになるが、このことにより、公園設置について、「住民要求が県を動かした面もあったと推測される」(蘭田香融・藤本清二郎 1991 60頁)とされたところから、更に、公園設置が和歌村(村民)の粘り強い景観保全活動の成果であったことが、歴史的・社会的具體相において了解し得る地点にまで進むことができるのである。以下では、この大変に興味深い、幾分ドラマチックな様相を呈する応酬を、資料に即して時系列で詳しくみて行くことにしたい。

①明治25年5月9日

和歌村々長名で、和歌山市に対して、慶応2年8月7日に暴風雨で倒壊した観海閣の再建が、何故に和歌山城下の町人の寄附で行われることになったのかということにつき、まだ当時のことを知っている人もいるであろうとして、次のような照会をする。

「徳川頼宣公ノ建造物ニシテ旧和歌山藩主之レヲ再興スヘキ筈、其儀ナクシテ和歌山市民ノ寄附スル所以ノモノハ、何等ノ事情又ハ手続ニ依リ寄附再興セシモノナル乎、詳細承知致度」(『(牡)蠣海苔漁業其他必要書類留：明治5年6月より』(和歌川漁業協同組合蔵)、藤本清二郎 1990 159頁)

②明治25年7月27日

上記の照会に対して、和歌山市長名で出された回答が、先に見た「再建要領」である。すでにその内容については検討しているので、ここでは、とくに何故に「和歌山市民ノ寄附」によったのかということについて、次のような説明がなされているところを見ておこう。

「而シテ該工事ヲ独リ当市民ニ於テ負担シタルモノハ、又タ必ス理由ノ存スルアリテ、然ルモノナラントス、今其因由ヲ追尋スルニ、当時紀之川末流・湊川等ノ各可川域ニ於而ハ、舟遊又ハ魚獲ノ如キハ、藩士ノ外ハ禁止ナルモ、独リ和歌川拝殿(観海閣)近傍ニ限り、平民ノ如キモ均シク之ヲ為シ得ラル、ヲ以而、同所ハ恰モ当時和歌山市民ノ遊娯樂場ニ特設セラレンモノ、如シ、斯クノ如ク関係ヲ有スル地域

中ニ建設ノ拝殿ナルガ故ニ、此ノ因縁ヲ理由トシ、再建工事ヲ和歌山市民ノ寄附ニ説諭ヲ下シタルモノトス」(同前 161頁。藤本清二郎氏の翻刻を一部修正している)

明解な説明である。要するに、観海閣は、民衆にも開放された施設(“共楽の施設”)で、「恰モ当時和歌山市民ノ遊娯楽場ニ特設セラレンモノ、如シ」場所にあったので、和歌山市民(城下町人)は自らの寄附でその再建に応じたというのである。

③明治25年 8月17日

和歌村は、上記の和歌山市からの回答などを踏まえて、和歌村々長名で、郡(第一科長)からの照会に対する回答として「上申」を提出する(文書としては残されていないが、先にみた和歌村から和歌山市に出された照会には、それに先だって郡から和歌村に照会がなされていたのである)。内容は、次のようなものである。「拝殿築造ノ事由」としては、

「拝殿創建築年月不詳、旧藩祖徳川頼宣公ノ建造ニ係ルモノニシテ、世伝フルニ藩祖熊野三山遙拝スル所ナリト云フ」とし、

「拝殿再築ノ事由」としては、

「慶応二年八月七日暴風雨ノ為メ拝殿崩壊シ、同年九月十二日再興着手シ、同三年九月三日落成セシ旨、拝殿棟札ニ明記アルモ、其再興者詳カナラス、然ルニ聞キ伝フル所ニ依レハ、和歌山市民ノ再興セシモノナル趣付テハ、和歌山市長へ別紙第壱印ノ通問合候処、別紙第二印ノ通回答相成候、之レニ依テ之レヲ観レハ、和歌山市民ノ再興セシ事認ムルニ足レリ、尚詳細ニ到テハ別紙ニ明記アルヲ以テ之レヲ略ス」とし、

「管理法」については、

「観海閣即チ拝殿之義ハ、旧藩祖ノ造営ニ係ルヲ以、年々旧藩主修理ヲ加ヘ、管理ナセシカ、廃藩置県以降ハ和歌村役場ニ於テ管理仕来リ候、右取調此段上申候也」としている(以上、同前 162~163頁)。

ここで注目すべきは、以上のような「上申」には、更に次のような「追伸」が添えられていたということである。

「追伸、近年該建造物屋根廻リハ破損有之、然カルニ本村民力困弊ノ今日ニアリテ、到底行届兼候時も有之、畏モ該建物保持セサレハ、本村風致ニ関係スルヲ以テ憂慮罷存候、此風致ヲ毀損スレハ独り和歌村而已ナラス、和歌山市へ関係ヲ来タス事往々有之付テハ、広ク寄附ヲ募リ該建造物保存ノ方法相立度見込ニ有之、因テ此旨申添候」(同前 167頁)

この「追伸」で、和歌村は、「此風致ヲ毀損スレハ独り和歌村而已ナラス、和歌山市へ関係ヲ来タス事往々有之付テハ、広ク寄附ヲ募リ該建造物保存ノ方法相立度見込ニ有之」として、寄附を集めてでも観海閣の修理をしたいとしているのである。

明治25年 5月 9日付の書面(和歌村から和歌山市への照会)に始まる以上のような遣り取りの前提には、すでに触れたように暴風雨による観海閣の破損とその修理問題があり、和歌村と県(郡)との間で応酬があったものと推断することができる。即ち、村は早期の修理が必要とのことから、これまで通りに村費での修理を行おうとしたのに対して、後に村から出された書面で「近年町村行政度緻密ニ相成候付、随テ村費ノ支弁モ亦容易ニ難相成」とされているところから見て、県(郡)からそれを止める指導がなされたと思われるのである。村費による観海閣の修理の根拠が問題になったところで、郡(第一科長)から観海閣の管理等についての照会がなされ、それが起点になって、以上の遣り取りがなされることになったと考えられるのである。

以上の経過で観海閣の建造や当時の管理をめぐる事態は一応明らかとなるのであるが、和歌村としては、観海閣の修理を村費で行うための根拠を明示することが出来なかったことになり、その限りで県(郡)側の壁を崩すことはできなかったのである。そのことに対する対抗措置が、「追伸」であったと思われる。この「追伸」で広く寄附を募って修理をするとしているのは、この間に明かになった慶応2年~3年に行われた和歌山市民(城下町人)の寄附による観海閣再建を踏まえてのことと考えられるが、これに対する県(郡)からの返答は、10月に郡から和歌村に出された通達であったと思われ、その内容は、「所有者も不明確なものを勝手に修理してはならない」というものであったと思われる。ということであったとすれば、この間の遣り取りで、和歌村は、県(郡)の壁を崩すことはできず、更に何らの手立ても講じることが出来ない状況に追い込まれてしまったことになり、和歌村は、この間の県(郡)との遣り取りでは、“完敗”であったことになる。

上述の経過が第一幕であるとすれば、先にも述べたように、第二幕は、幾分ドラマチックな様相で和歌村の“完勝”に終わることになる。その経過は、以下のようのものであった。

④明治26年 4月 1日

和歌村は、和歌山県知事宛てに「和歌村妹背山ニ建立スル拝殿、村ノ営造物ニ御認定願」(以下「認定願」とする)を提出する。文面は以下の通りである。和歌村の言い分がよくわかるものであり、長文になるが引用する。

「当和歌村妹背山ニ建立セシ拝殿之義ハ、原々和歌村風致ノ為メ和歌山藩祖カ創建シタルモノニシテ、現在ノ建物ハ慶応二年有志者ノ寄附ヲ以テ、再興セシモノニシ有之候、而シテ明治維新迄ハ和歌山藩主ニ於テ管理セシモノ、如クナリシカ、廃藩置県後ハ之ヲ管理スルモノ無之、之レヲ傍観座視スルトキハ

自然建設之素志ヲ空シクシ、吾カ村勝区ノ美觀ヲ失フノ恐レアリ、故ニ和歌村ニ於テ該建物ヲシテ爾來之レヲ管理シ、破損ニ罹レハ之レニ修理ヲ加ヘ、以テ本村所有ノ如ク保護致來候得共、近年町村行政制度緻密ニ相成候付、随テ村費ノ支弁モ容易ニ難相成、就テハ該建物ノ如キハ未タ確然本村ノ所有トモ見做シ難キヲ以テ、近年ニ至リテハ暴風雨ノ為メ該建物破損スルト雖トモ、直ニ之レヲ修善スルヲ得ス、為メニ漸次大破ニ及ヒ、現今修繕セントスレハ、別紙目論見ノ通り多額費用ヲ要シ候、去リトテ此儘歲月ヲ累ヌルトキハ、終ニ全部ニ深朽ヲ及ホシ、如何共為ス能ハサルニ至ント深く苦心罷存候、付テハ今回本村会ニ諮詢セシニ、先以テ該建物ヲシテ明カニ本村營造物タル事ニ、其認定ヲ仰キ、其御採用ヲ得ハ、即チ本村風致上必要ノモノニ付、現今破損ケ所ハ勿論、尚年々破損ケ所ハ本村々費ヲ以テ修繕シ、從來ノ通り何人ニ限ラス、随意遊樂場ニ供セント議決致候付、何卒右御採用相成度、此段相願候也」(同前 163~164頁)

この「認定願」は、和歌村が体勢を立て直し、県に對して改めて、觀海閣の早期の修理を求めたもので、村の決意が滲み出ている^(註11)。それだけ觀海閣の修理＝風致の保全是、村にとって切実な問題になっていたということになる。觀海閣を村の所有として認めさせるために上記のような「認定願」を提出することは、その修理に村費を使うこともできず、また恐らくは寄附の募集も封じられて窮した和歌村が、事態打開のために県に對して講じ得た最も強力な対抗策であつたろうと思われる。

②明治26年5月22日

和歌村の「認定願」に對して、郡(名草海部)は、「妹背山拝殿營造物認定願ノ件通牒」を出して応じている。内容は、「認定願」に添えて出されていた修理費用の見積額に問題があるとの理由で、もう一度調査して出し直すようにというものであつた(同前 166頁)。言わば本筋でないことに難癖をつけて、「認定願」を和歌村に差し戻したのである。その後、日付は不明であるが、県は、改めて内務部長からの通牒を出して、「認定願」を和歌村に差し戻している。その言い分は、觀海閣は徳川家(旧藩主)のものであるから、「認定願」は、県ではなく徳川家に出すようにというものであつた。

③明治26年10月13日

県から徳川家に出すようにと、「認定願」を差し戻された和歌村は、県から差し戻されたのと同文の「認定願」を徳川家に差し出す。ただ、この際に和歌村は、次のような追伸も書き加えた。これも長文になるが引用する。

「追伸、同所妹背山ニハ、御先祖頼宣公ノ御真母様養珠院殿靈祀ノ宝塔有之、当初宝塔ノ前ニ拝殿及唐門等建立有之候處、暴風之為メ倒壞(其年月不詳)シ

タルモノニ有之候、觀海閣ハ山下ニ存リテ水上ニ臨ミ建設有之候、然ルニ觀海閣ハ、養珠院殿ノ御追善修スル為メ御建立セラレタルモノ、如ク謂フモノ有之候得共、其拝殿ハ前叙ノ通り已ニ倒壞シタルモノニテ、現今存在無之候(以上ノ事實ハ紀伊続風土記ニモ之ヲ証サエリ)、觀海閣ハ從來衆庶ノ遊樂場ニ供シアルモノニシテ、全ク和歌村風致ノ為メ御創建相成候モノニ外ナラズ、慶応二年八月ニ至リ暴風ノ為メ倒壞セシニ、當時海内騷擾軍事上費途多端ノ際、觀海閣再築費ノ如キハ藩庫ノ支フベカラサル所ナルヲ以テ、和歌山市有志者ノ寄附ヲ以テ再興セシモノニ候得共、固ヨリ御祖先御創建ニ係ル建物ニシテ、和歌山市民有志者ハ国費ヲ補助スル為メ寄附再建セシモノニ過キサレハ、再築寄附者等ノ所有ニ帰スヘキニ非サル事明瞭ニ有之候、御参考迄此段申副候」(同前 167頁)

内容は、和歌山市が作成した「再建要領」において、多宝塔の拝殿(すでに失われてしまっている)と拝殿と呼ばれている觀海閣とが混同されていたことを踏まえてのものと思われるが、觀海閣と多宝塔の拝殿とを混合しないようにというものである。こうした追伸の内容からも、和歌村が觀海閣修理(そのための村有認定)を切実に求めていたことがよく分かる。

④明治26年10月18日

和歌村が徳川家に觀海閣の所有認定願を出したのに對抗してであろうか、丁度計ったようなタイミングで(県から報恩寺に對して情報提供等のことがあつたのであろうか)、報恩寺から觀海閣は明治11年(1878)に徳川家から譲り受けたものであるとの主張がなされる。即ち、明治11年に徳川家から譲り受けたのを寺社明細帳に記載する手続きができなかったのを、それをするために「明細書へ記入願」を県知事宛てに提出するというのである(同前 168~169頁)。この「明細書へ記入願」には、和歌山市長も連署していた。

⑤明治26年11月1日

上記「明細書へ記入願」に日蓮宗管長大僧正小林日薫による10月25日付の添書が付け加えられた書面が、和歌山市から和歌村に送られてくるのである。和歌村に對する要請は次のようなものであつた。

「御部内字妹背ニ建設アル觀海閣建物、本市真砂丁二丁目報恩寺明細帳ニ記入洩れ相成之趣ヲ以テ、右記入方同寺住職辻井日教ヨリ、別紙願書差出來候間、署名連印之上及送付候条、御連印済其筋へ御進達方可然御取計相成度、此段及照会候也」(同前 169~170頁)

要するに、和歌村も報恩寺の言い分を認めて、連印し、其筋(郡一県)に提出するようにして欲しいというのである。勿論、そのようなことをすれば、和歌村の「認定願」は意味をなさなくなり、万事休すということになる。こうした書面が和歌村に送られてくるから

には、その一方で、報恩寺が徳川家の奥方たちの墓所になっており徳川家との関係も深いことから、徳川家に対しては和歌村からだされていた「認定願」に対する回答で、観海閣を報恩寺のものとして確認するようにすでに根回しがなされている恐れもあった。とすれば、和歌村は窮地に立たされたことになる。

⑥明治26年11月15日

和歌村は、報恩寺一和歌山市の動きを受けて、徳川家に対して、先に出した「認定願」への回答を至急出してもらおうべく、「願い」を出す(同前 170頁)。

⑦明治26年11月19日

和歌村からの「至急の回答」を求める「願い」に対して、徳川家からの返答は早かった。文面は、「客月十三日付ヲ以被差出候和歌村妹背ニ建設セル観海閣建物之儀ニ付、尚取調候処、別紙写之通当時之藩庁へ届済ニ相成有之ニ付、当方ニ於テ指令スヘキ筋合無之与被存候間、御差出之書類、其儘返却候也」という、素っ気ないものであった。しかし、別紙写に記載されていたことは、和歌村の立場を決定的に有利にするものであった。「二十六年十一月九日 中川審六郎ニ及照会候控」と題された別紙写とは、次のようなものである。

「和歌妹背鳴之儀ハ、養珠寺同様家令所持之御場所ニ候処、道橋宮繕等於役所行届兼候付、以来別紙絵図面朱引之外ハ藩庁持ニ相成候様致度存候事、

明治四年五月十四日

家令

藩庁参事御中

右書付差出候処、直ニ御聞届相成、藩庁より水野刑部、家令所より鶴沢雅房立会、朱引外ノ家屋并木石共悉皆引渡候事」(同前 171~172頁、図1 参照)

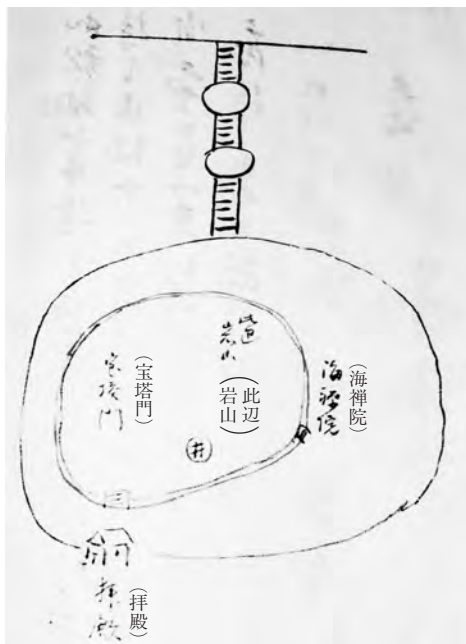


図1 徳川家から和歌村への返答に添付されていた妹背山の図
徳川家は、図の中側の二重線の円と外側の円との間を明治4年に当時の藩庁に譲りわたしたとしている。

要するに、明治4年5月14日付で、当時の藩庁に観海閣のある場所及び観海閣は引き渡されているというのである。とすれば、その後、土地されておれば国有地であり、そうでなければ県有地ということになる。

「別紙写」により、県が徳川家のものとしたことが全面的に否定され、報恩寺の主張もその根拠を失い、県が責任を負うべきものになったのである。

⑧明治26年11月25日

和歌村は、徳川家からの回答を得て、早速、県に対して次のような要望書を出す。これも長文になるが、以下に引用する。

「当和歌村妹背ニ建立セル拝殿之義ハ、杜寺明細帳ニ記載無之ニ付、管理所属決定等之義、本県ヨリ照会有之候旨ヲ以テ、客年十月名草海部郡役所ヨリ通達ノ次第有之候、就テハ本年四月本村会議決ヲ以テ、該建物ヲ村ノ営造物ニ御認定之義、別紙第一印写之通出願候処、該拝殿之義ニ付、去ル廿三年六月全村養珠寺住職ヨリ県庁ニ差出上申書ニ依レハ、徳川頼宣ノ真母養珠夫人ノ廟所ノ地位(乃宝塔是ナリ)是レカ為メ、旧政府ヨリ建設追善修スル場所トス云々、因テ該院管理者旧藩主ノ承諾ヲ得テ、村有財産ニ組入手続ヲ尽シ可然云々ト、本県内務部長ヨリ通牒有之候旨ヲ以テ、名草海部郡役所ヨリ右願書返戻相成候、由テ別紙第二印写之通旧藩主徳川侯エ承認願出候処、別紙第三印写之通回答相成候、右回答ニ依レハ、明治四年五月全家ヨリ当時藩庁へ引渡済付、該建物ハ無論県有財産タルヘキモノト被存候、果シテ県有財産ニ御認定相成義ニ候ハ、現今破損所ハ勿論、当年ニ破損個所等渾テ地方税ヲ以テ御修繕相成、而シテ其管理ヲ当村役場へ御委託相成度候、倘シ地方税ヲ以テ修繕難相成義も候ハ、曩ニ出願之通本村営造物タル事ニ御認定相成度、左候ハ、前叙破損個所等ハ悉皆本村々費ヲ以テ修繕シ、永遠ニ保存致度候間、何卒右宜シク御詮議相成度、別紙関係書類相添、此段相願候也」(同前 171~172頁)

これは和歌村の県に対する勝利宣言とも言えるべき文書である。観海閣は県が責任をもつべきはずのものであるから、当然のこととして地方税で修理すべきである、もしそれができないのであれば村所有にして欲しいとし、そうすれば、今後ともに永久にしかるべき保全措置を講じるようにしたいと思っているので、県としてよく考えて欲しいというのである。この段に至って、流石に県も和歌村の要望を無視することは出来ず、報恩寺の主張も却下される(同前 173~174頁)。

4. 和歌公園の成立

i) 和歌公園の設置

明治25年に始まる観海閣の修理をめぐる和歌村と和歌山県の応酬が和歌村の“完勝”に終わって間もなく、和歌山県は、和歌の浦における公園設置に動き出す。

明治27年には県議会に和歌公園設置が諮られることになる。こうして県は、和歌公園設置にむけて動き出すことになるが、和歌山城を公園化する狙いもあったのであろうか、和歌山城に隣接している天妃山(岡公園となる所)と抱き合わせにして、和歌公園の設置が進められることになる^(註12)。

『和歌山県議会史 第1巻』によれば、和歌公園(和歌の浦)と岡公園(天妃山)の設置につき、明治27年の通常県議会(明治27年11月6日～12月5日)に議案提出され、次のような議決が得られたとしている。

「公園設置ニ関スル件

- 一 海部郡和歌村全村ヲ画シ公園地区ト定メ和歌公園ト称ス^(註13)
- 二 前項地区内ニ存ル官有地(社寺境内ヲ除ク)ハ無償ニテ公園地ニ編入ノ許可ヲ受クルモノトス
- 三 和歌山市岡山町天妃山所属ノ有租地ヲ画シ県ノ公園トス
- 四 前項有租地ハ公園地ニ編入シ除租ノ許可ヲ受クルモノトス
- 五 公園費ハ各特別経済トナシ之ヲ整理スルモノトス
- 六 公園地区内ト雖モ道路其他土木費ニ関スルモノハ従来負担ノ例ニ依ル
- 七 公園ニ属スル収入支出予算及寄附ニ係ル金穀物件ニシテ貳拾七年度貳拾八年度ニ係ルモノハ府県会規則第參拾七条ニ依リ常置ノ委員ノ決議ヲ経テ之ヲ施行ス」(和歌山県議会事務局編纂 1970 147～148頁)

県議会の議決を得ると、和歌山県は、日を経ずに国に公園設置の許可を求める稟請書を提出するのであるが、和歌公園設置と岡公園設置の稟請書(資料2、3)は、同日付(12月13日)で提出された^(註14)。和歌公園の母体となる和歌の浦と岡公園の母体となる天妃山とは、実は対照的な場所で、和歌の浦が城下町(市街地)を離れた海辺の開かれた名所であったのに対して、天妃山は和歌山城に隣接し、市街地の中心部にあって、それほど広くなく区画も明確な場所で明治になってからは西南戦争等の戦没者慰霊の記念碑が建立されたところであった。即ち、「岡公園ハ天妃山周囲ノ地ニシテ戦死者記念碑ノ存ル処ナリ城内巖石ノ翠苔樹林ノ緑葉掬賞スヘク而シテ市中中央ニアルヲ以テ各人逍遊ニ適ス」とされ、「和歌公園ハ風光明媚ノ勝地ニシテ天然ノ公園タリ」とされるところであった(同前 148頁)^(註15)。それぞれ稟請書の全文は後掲の資料(資料2、資料3)をみて頂くとして、それぞれに特徴となっていることを取り出してみると、次のようになる。

岡公園の場合

「和歌山ハ戸数壹万參千余人口五万五千余ノ一大市街ニシテ未曾テ公園ノ設ナク其不便ヲ感スルコト一日ニアラス然ルニ其天妃山ハ西南戦死者ノ記念碑ヲ建設シ

地位城ノ東南ニ方リテ高邱ヲ占メ琪樹恠巖相交錯シテ頗ル雅致幽趣ヲ極メ春秋ノ佳時ニ会スレハ衆庶皆来テ茲ニ遊息シ宛然公園ノ実ヲ備ヘ居リ候場所」ということになり、民有地になっていたのも、「今般其地所等ノ持主共ヨリ公園ニ寄附ノ義申出候」としている(地所の寄附で、県有地になり、公園申請が可能になった)。そして、「縣ノ公園トシテ地方税経済ヲ以テ維持然ルヘキ旨可決致」(「岡公園設置稟請書」〔和歌山県庁蔵〕)稟請するに至ったとしている。

和歌公園の場合

「本縣下海部郡和歌村ハ山水幽雅、風光明媚ニシテ其名四方ニ聞ヘ頗ル稀有ノ勝区」であり、「陸前ノ松島丹後ノ天橋安芸ノ巖島等並ニ称シテ相讓ラサル」にも拘わらず、「時勢ノ變遷ト共ニ其蹟漸ク荒廢ニ赴キ今ニシテ之カ保存ノ方法の設ツルニアラサレハ終ニ此勝区ヲシテ空ク湮滅ニ帰セシムルノ恐アリ」、また、「觀海閣ノ如キハ縣有財産ニシテ之ヲ保存スルノ必要アリ其他妹背山、鏡山、奠供山、望海樓趾、天神山、樞現山、等ノ如キ登眺及遊覽ニ必須ナル地ハ多ク皆上地官林ニ属シ衆庶ノ自由ニ之ニ立入り難キ牽制アリ其不便ヲ感スルコト亦少ナシトセス」として、公園とする必要があるとしている。最後に、「縣ノ公園ヲ設ケ之ニ編入シ地方税経済ヲ以テ之ヲ保持スルノ適当ナルヲ認メ仍チ縣会ニ諮問セシメ大多数ヲ以テ可決シタリ」(以上、「和歌公園設置稟請」〔和歌山県庁蔵〕)としているのは、岡公園の場合と同じである。

天妃山の場合には、明治12年(1879)に四役戦亡の「記念碑」が建立され、以来、招魂祭が催されるようになっていたが^(註16)、とくに公園とせねばならない差し迫った事情があったとは思えない。和歌の浦の公園申請と抱き合わせにするために、急遽所有者に寄附させて公園申請をしたのであろう。これに対して、和歌の浦の場合には、公園化は切実なものとして強調されており、觀海閣を県有とする必要性をはじめ、和歌村が県に対して言い募ってきたことが反映された内容になっている。

以上のような和歌公園と岡公園の設置稟請に対しては、岡公園設置は、翌年の明治28年2月8日付(後掲資料4)で認められたのに対して、和歌公園設置の認可は、11月27日にずれ込み、しかも次のような「注意」付きであった。

「尤公園ニ編入ノ地ハ名勝及風致上離権スルヲ得サルモノニ付他日若シ公園ノ名称ヲ廢スルコトアルモ県郡市町村等ヘ無代下附難相成儀ニ候条公園設置区域ニ變更ヲ生シタル点トモ併テ縣会ニ諮問シ予メ同会ノ意見確定ノ上ニアラサレバ公園開設不相成儀ト心得ヘシ」(後掲資料5「和歌山市ニ公園設置稟請ニ対シ許可並注意ノ件」〔和歌山県庁蔵〕)

こうした「注意」が付けられるのは、やはり和歌公園が散在した形での指定になることにあったと考えら

れる。公園が民有地を含まない営造物公園として設置される以上、和歌の浦においては、散在型になること

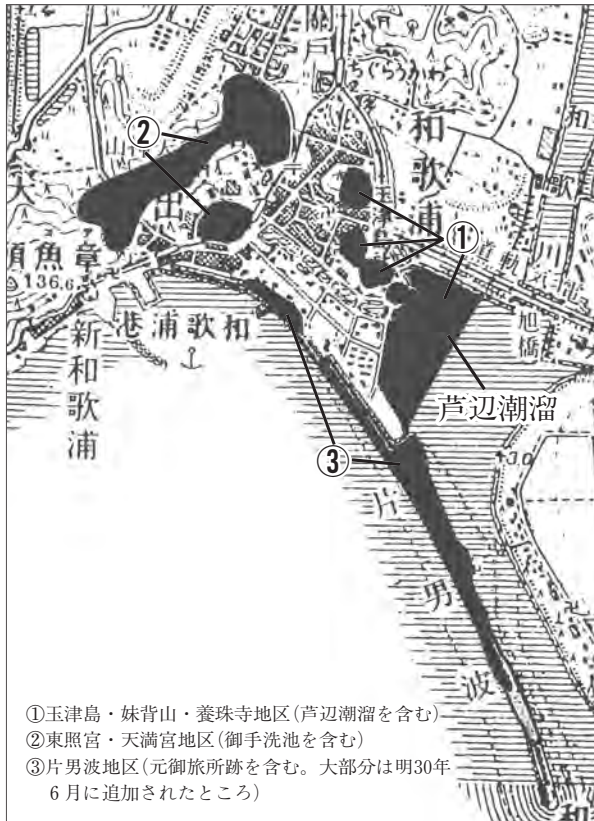


図2 明治30年代の和歌公園概念図

当時の公園区域を示す図面が残されておらず、図中の公園の範囲と位置は必ずしも正確には描かれていない。

は避けられないことであった(図2)。

民有地と国有地とが混在することになっているのは、和歌の浦が民衆の生活の場をも含む形で開かれた景勝地としてあったことに起因しており、この点で、和歌の浦の景観の保全と維持は、営造物公園の制度では十分に行い得ないことを示すものであったとも考えることができる。実際、和歌の浦の場合のように民衆の生活の場をも含む形でその景観の保全と維持が求められる場合、それは、近代以降の日本においては極めて困難な課題となるのである。その端緒がすでにこの時に現れていたと考えることが出来る。

ii) 和歌公園の指定範囲と経営

ところで、和歌公園の設置範囲の特徴としてみておくべきものに、散在型になっていることの他に、その設置範囲に芦辺潮溜(図3)が入れられていることがある。当然のことながら、干潟(水面)が和歌の浦の不可欠な構成要素と認識されていたことからであろう。明治28年に国に提出された「和歌公園設置稟請」に添付された「和歌公園沿革」には、芦辺潮溜は、鏡山、妹背山、不老橋、東照宮、天神神社と並べて勝区の一つとされ次のような説明がなされている。

「字津屋ニ属スル湾形ヲ為シタル處ニシテ古ヘ和歌川筋トノ間ニ境界ヲ存セシモ爾後幾回ノ洪水海嘯等ヲ経テ漸次崩壊シ別ニ修治ヲ加ヘサリシニ依リ今ハ全ク該川ト流レ通スルニ至リシモ元ト潮溜ノ場所ナルヲ以テ流勢緩慢自ラ一区域ヲ為シ四望快濶ニシテ春夏ノ交ヨリ夏秋ノ際ニ及フノ間ハ納涼又ハ観月ノ

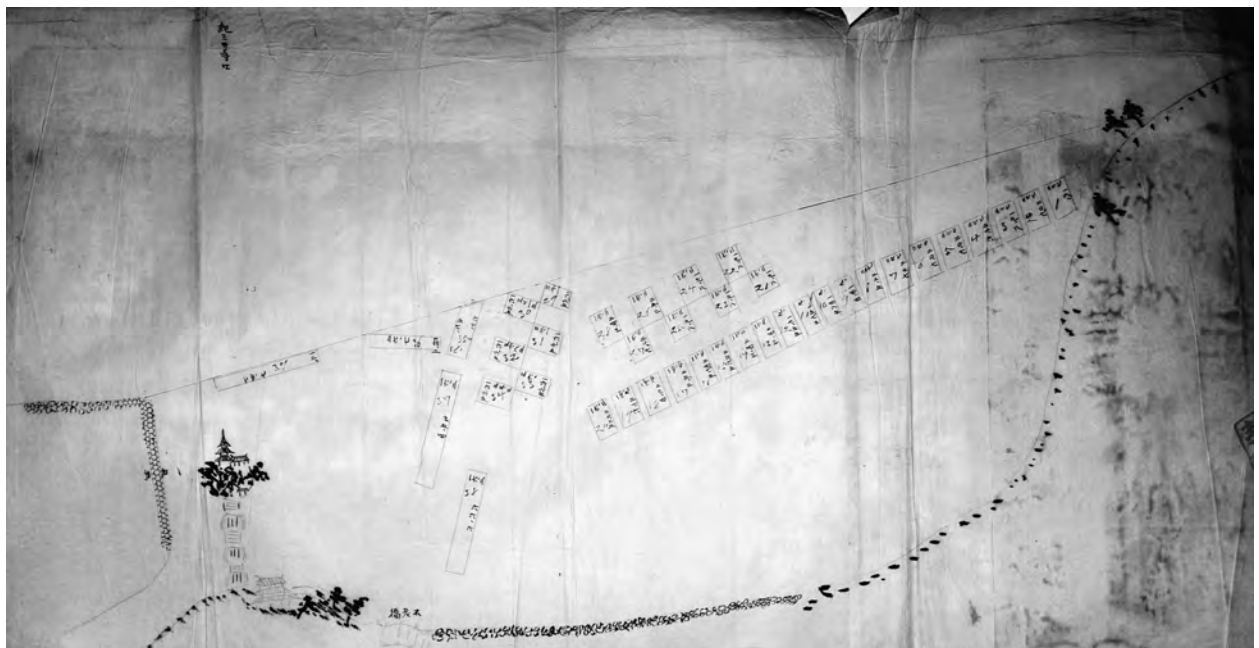


図3 芦辺潮溜の図(『(牡)蠣海苔漁業其他必要書類留：明治五年六月より』〔和歌川漁業協同組合蔵〕所収)

図は上側が東で左下隅に突き出た三断橋と妹背山が描かれ、右上隅の松は、片男波における目印にされたものである。左端やや下に描かれた護岸角から片男波の松を見通した線の内側(西側)が芦辺潮溜である。四角の升目状のものは、海苔養殖場所の区画で、その割り当ては毎年くじで決められる。

為メ遊船多ク茲ニ群集ス」(和歌山県蔵 1894年B)

ただ、このような認識とは別に、芦辺潮溜が公園に組み込まれたのには、切実な事情があったことにも目を止めておく必要がある。和歌の浦における公園設置が容易に認められなかったのには、散在型にならざるを得ないということの他に、やはり県の煮え切らない態度も影響したと思われる。公園設置に対しては、県が費用負担(地方税の充当)という点においても責任を果たさねばならなくなるが、そうした点において明確な方針がなかった可能性がある。それは、先に見たような観海閣の修理問題における和歌村と県との応酬に如実に表れているとみることが出来る。こうした費用負担の問題を解決し、和歌公園の設置が実現するには、芦辺潮溜の公園区域内への取り込みは不可欠なものであったと思われる。和歌の浦の干潟では、海苔の養殖と牡蠣の採取が行われていたが、これに対しては、村から使用料が県に対して支払われていた。この内、芦辺潮溜が公園区域に入れられることで、その分の使用料(地方税)が公園費用として充当されることになるの

である。

県としても公園指定する以上、経営と管理に責任をもつ体制が必要になる。とくに経費に充てる財源をどのようにして確保するかが問題になる。公園は特別会計とされ、独立採算が指されることになることから、公園使用料を財源に充てることは、一般的に想定されていたことであった。和歌の浦の場合には、芦辺潮溜が公園に組み込まれることで、芦辺潮溜で行われている海苔養殖と牡蠣採取に対する使用料を徴収し、それを公園経費に充てることになったものと考えられる。干潟(芦辺潮溜はその一部)における海苔養殖、牡蠣採取で使用料を県に払っている和歌村(村民)からすれば、その使用料が公園経費に振り向けられることは歓迎すべきことであり、県としても公園設置を回避できない状況下では、合理的な政策判断であったろう。

初年度の使用料は、海苔養殖分が40円、牡蠣採取分が60円であった(『(牡)蠣海苔漁業其他必要書類留：明治5年6月より』〔和歌川漁業協同組合蔵〕、藤本清二郎 1990 178～179頁)。表1は『和歌山県議会史 第1

表1 和歌山県和歌公園 歳入歳出

自 明治29年度 至 明治35年度			公 園 歳 入 之 部						
科目 \ 年度			29	30	31	32	33	34	35
収 入			179.035	306.019	466.263	351.973	539.023	697.406	887.872
内 訳	財 産 収 入		——	——	——	5.423	10.580	16.119	23.480
	内 不 動 産 収 入	——	——	——	1.250	1.500	1.500	1.500	
		動 産 収 入	——	——	——	4.173	9.080	14.619	21.980
	使 用 料		179.035	195.138	219.500	248.586	282.423	301.423	386.171
	雑 入		——	32.250	14.635	64.444	45.257	84.405	17.450
	前 年 度 繰 越 金		——	78.631	232.128	33.520	200.763	295.459	460.771

自 明治29年度 至 明治35年度			公 園 歳 出 之 部						
科目 \ 年度			29	30	31	32	33	34	35
支 出			100.404	73.891	432.743	151.210	243.564	236.635	380.089
内 訳	管 理 費		100.404	73.891	432.743	151.210	243.564	236.635	380.089
	内 訳	雑 給	—	—	116.950	129.675	168.314	132.100	193.697
		備 品 費	—	—	1.400	—	2.270	13.000	11.990
		消 耗 品 費	—	—	—	—	—	—	5.960
		樹 木 費	—	—	—	14.075	45.500	4.900	103.710
		修 繕 費	—	—	312.433	5.660	24.830	80.120	56.432
		雑 費	—	—	1.760	1.800	2.650	6.515	8.300
		建 築 費	—	—	—	—	—	—	—

(『和歌山県議会史 第1巻 付属表』より作成)

※明治31年の歳出之部の合計と内訳の合計とは合っていない。

巻 付属表』に掲載されている表から作成したものである。明治29年の場合、歳入は179.035円であり、すべて公園使用料である。公園使用料の内訳は不明であるが、明治29年については、芦辺潮溜における使用料が海苔養殖分と牡蠣採取分を合わせて100円であったことが分かっているので、差し引き79.035円が芦辺潮溜以外での公園使用料であったということになる。公園使用料額は、増加傾向にあり、明治35年には、887.872円になっている。芦辺潮溜での使用料に大きな変化がなかったとすれば、それ以外での公園使用料額が大幅に伸びていたことになる^(註17)。

ところで、表1を注意して見ると、歳出では、明治31年に修繕費312.433円が計上されているのが目を引く。前年度繰越金が、232.128円になっており、恐らく観海閣の修理費に充てられたものと思われる。

iii) 和歌公園の公園規則

和歌公園の特徴は、その公園規則にもよく表れてい

る。

最初の公園規則は、明治29年7月15日に制定された「和歌山県岡公園及和歌公園規則」（後掲資料6）である。4章立て、40条に渡るものであるが、その第一章は「土地家屋使用」とある通り、実質的に使用規則といふべきもので、当時の他の公園規則の場合と共通する内容構成であったとみてよかろう。第一条に「公園ニ於テ地所建物ノ使用ヲ許スハ当庁ニ於テ衆庶ノ偕楽ニ供シ若クハ遊歩者ニ益ヲ与フヘシト認ムル者ニ限ル可シ」というのを置き、以下、地所の使用に際しての条件、手続き等に関わるものが第二条から第廿二条までである。第四章第三九条に「附則」として、「岡公園ニ於テ記念招魂式執行当日ニ限り衆衆ノ遊歩ヲ制限スルコトアルヘシ」とされているのと、第二章に「寄附」に関わる条項が設けられているのは、岡公園の特徴を考慮してのものであろう。岡公園の場合、明治以降の歴史は、上述のように明治12年に四役戦亡の「記念碑」が建立されたことに始まり、その後、毎年招魂祭が行

表2 和歌山県岡公園 歳入歳出

自 明治28年度 至 明治35年度		公園歳入之部							
科目	年度	28	29	30	31	32	33	34	35
収入		446.956	849.502	724.407	749.761	797.309	958.189	1210.965	1221.864
内 訳	財産収入	124.296	401.799	213.931	344.721	307.186	554.365	504.300	423.831
	内 不動産収入	—	—	—	267.347	239.946	507.289	461.466	387.529
	内 動産収入	—	—	—	77.374	67.240	47.076	42.834	36.302
	寄付金	250.000	250.000	350.000	250.000	350.000	250.000	300.000	300.000
	雑入	72.660	3.625	95.600	105.500	106.550	82.250	95.150	79.300
前年度繰越金		—	194.078	64.876	49.540	33.573	71.574	311.515	418.733

自 明治28年度 至 明治35年度		公園歳出之部							
科目	年度	28	29	30	31	32	33	34	35
支出		252.878	784.626	674.867	716.188	725.735	646.674	792.232	705.945
内 訳	管理費	69.805	543.017	369.392	406.197	441.195	337.360	469.923	399.962
	内 雑給	—	—	—	224.820	234.353	214.245	226.165	200.622
	内 備品費	—	—	—	65.420	23.480	20.360	18.355	11.890
	内 消耗品費	—	—	—	45.782	31.249	22.735	44.095	28.020
	内 樹木費	—	—	—	10.000	2.230	—	—	1.500
	内 建築修繕費	—	—	—	51.975	145.833	70.670	176.908	137.980
	内 雑費	—	—	—	8.200	4.050	9.350	4.400	19.950
	記念式費	182.585	241.609	305.475	309.991	284.540	309.314	322.309	305.983
	内 雑給	—	—	—	59.690	81.275	79.390	92.713	90.940
	内 需用費	—	—	—	100.691	136.535	146.494	144.841	134.678
内 訳	内 賄費	—	—	—	111.340	52.480	68.680	62.300	62.640
	内 雑費	—	—	—	38.270	14.250	14.750	22.455	17.725
	元資積立	.488	—	—	—	—	—	—	—

（『和歌山県議会史 第1巻 付属表』より作成）

われる場所になっており、各種の記念碑が多く建てられるところになっていた。公園設置後は、こうした行為は寄附として処理されることになったと考えられる。

和歌公園も設立当初上述のような規則で運用されたことになる。しかし、和歌公園の場合、当時の一般的な公園規則(公園使用規則)では不十分と考えられたのであろう、明治32年3月17日に「和歌公園規則」(後掲資料7)が制定されるが、この規則は、和歌公園の特性に配慮したもので、当時他に例をみないような内容を含んでいた。

まず第一章「公園取締」で一般的な使用規制を示し(第一条、第二条)、第二章では、「土地・建物使用ノ分界」として、土地区画毎に使用条件を三段階に分けて明記している(第三条、第四条、第五条、第十一条、第十二条)。第三条では、「公園ノ内左ノ場所ハ、風致又ハ波浪ニ関係アルヲ以テ、一切使用ヲ許サ、ルモノトス」とされ、8ヶ所が列記されている。第四条では、「公園ノ内左ノ場所ハ、第六条ノ制限ニ依リ、一ヶ所乃至三ヶ所露店設置ノ為使用ヲ許スヘシ、其使用期限ハ五年以内トシ、満期継続願出ルコトヲ得、但一ヶ所五坪以内トス」とある。「第六条ノ制限」としているのは、「衆庶ノ偕楽ニ供シ、若ハ遊歩ノ便ヲ図ル目的ヲ以テ経営スルモノニシテ、左ノ条件ヲ遵守スルモノニ限ルヘシ」とあることで、「衆庶ノ偕楽ニ供シ、若ハ遊歩ノ便ヲ図ル目的」に照らして、勝手な現状変更を認めないというものである。このような条件で使用が認められる場所として、8ヶ所が列記されている。第五条では、「公園ノ内左ノ場所ハ、第六条ノ制限ニ依リ使用ヲ許スヘシ、其使用期限ハ十ヶ年以内トス、満期継続願出ルコトヲ得」とされており、7ヶ所が列記されている。以上とは別に、第十一条で、「公園ノ内左ノ場所ハ、従前ノ慣行ニ依リ、又ハ新ニ生産物利用ノ為使用ヲ許可スルコトアルヘシ、其年限及使用ノ制限等ハ第五条以下ノ規定ヲ準用ス」として、「芦辺潮溜」以下4ヶ所が列記され、また、第十二条では、「公園ノ内左ノ建物ハ、保護上必要ノ為、二年以内ニ限り使用ヲ許スコトアルヘシ、其使用ノ年限等ハ第五条以下ノ規定ヲ準用ス」として、観海閣を挙げ、更に、「前項ノ使用ノ許可ヲ得タルモノハ、観海閣保護ノ責ニ任スヘシ」としている。

各条に列記された箇所は、表3にみる通りである。このように土地区画毎に使用不可を含む肌理細やかな利用規制が設けられたのは、和歌公園(和歌の浦)の特徴に即してその景観の保護を重要視したからであろう。明治29年の規則では不十分として、このような和歌公園の特徴に即し、景観の保全を重視した規則が新たに設けられることになるのには、明治18年に和歌村が公園設置を県に請願した際に作成された土地区画の多くが使用不可の場所に位置づけられていることから窺えるように、やはり和歌村の意向が大きく作用したも

のと考えられる。和歌山県の行政的発想では、当時の極一般的な公園規則をもって足りると思っていたと思われる。明治34年に和歌山城が和歌山公園に指定され、公園規則が設けられた際にも、その内容は極一般的なものに留まっている。

和歌山県の公園設置と公園規則制定の流れをみると、以下ようになる。最初に岡公園と和歌公園が明治28年に設置されたのに対応して明治29年7月15日に両公園共通の「和歌山県岡公園及和歌公園規則」(発効は7月19日)が制定される。次いで、明治32年3月17日に和歌公園の特性に即した「和歌公園規則」(発効は4月1日)が制定されることになり、この時点で和歌山県の公園は、「和歌山県岡公園規則」(「和歌公園規則」が制定される際に「和歌山県岡公園及和歌公園規則」は内容を改められることなく「和歌山県岡公園規則」に名称を改められている)と「和歌公園規則」というように、公園それぞれに規則が設けられることになる。すでに触れたように和歌山公園の場合にも、その設置に伴い明治34年3月30日に別個に「和歌山公園規則」(発効は4月1日)が制定されることになる。しかし、こうした公園毎にそれぞれ公園規則が設けられる仕組みは長く続かず、明治39年12月19日に三つの公園共通の「公園管理規則」(発効は明治40年4月1日)、「公園管理規則施行細則」(発効は明治40年4月1日)が制定されて、和歌山県の公園は共通の公園規則で管理運用されることになる。その後、この明治39年に新たに制定された公園規則が和歌山県共通の公園規則として定着することになるのであるが、この共通の規則では、和歌公園(和歌の浦)の特性に即した使用不可を含む土地区画毎の肌理細やかな規定は、すべて削ぎ落とされてしまうことになる。

明治40年代以降、和歌の浦は、開発の大波に繰り返し曝されることになる。明治43年に奠供山に設置されたエレベーターは、明治32年に制定された「和歌公園規則」では、許可されないはずのものであったが、明治39年に制定された共通の規則(後掲資料8)では、認められることになっていたのである。

5. 結語

近代以降における和歌の浦の景観保全と管理をめぐる問題は、言うまでもなく和歌公園の設置に関わる事柄に尽きる訳ではない。しかし、明治初期から明治20年代における和歌の浦の景観保全と管理をめぐる問題は、公園設置を軸に展開しており、そこには、本稿で検討したような興味深い諸行為の連鎖とそれらが織りなす歴史的具體相がある。

明治40年代以降、和歌の浦は巨大な開発の渦中に置かれることになる。現在の和歌の浦の景観は、それを潜り抜けてきたものである。この現在に残された和歌の浦の景観の主要部分が、今年(2010)8月15日付で国

表 3 和歌公園地区一覽

番 號	理 由	規 定 用	地 種	地 目	字	地 番	反 別	事 由	治 革	現 在 面 積
1	B	第三種	美官供林山	津屋	一〇六七	四反七畝一步	明治廿八年十二月和百四十日本県告示第一九二號以テ可國ニ充用スルコトヲ示シタルモノナリ	内十八日玉津島神社境内へ編入	一反八畝一九歩	
2	A	"	東照宮上地	西ノ濱	一三〇七	三町四反五畝一七歩	全	内一年五月十三日官社東照宮境内へ編入	二町四反一畝九歩一二	
3	C	"	天神社上地	全	一三〇五	一五町四反七畝二三歩	全	内正八年四月二十二日天満宮境内へ編入	一四町二反六畝八歩二七	
④	A	"	玉津島神社土地鏡神山	津屋	一〇六五	二反三畝二〇歩	全	内五月三七坪八合八勺ハ昭和二十二年ニヨリ塩釜神社境内へ編入	二反二畝二歩一二	
5	① ② ③	C B C	養珠寺上地	和田	六六八三八六六六	一町四畝	全	内四畝二八歩明治四十三年一月ヨリ道路敷ニ編入	九反九畝二歩	
6	① ② ③	A A A	海禪院上地	津屋	一〇六一 一〇六二 一〇六四	一反六畝二〇歩	全	内一〇六二番三畝二歩 一〇六四番九畝十歩	一反六畝二〇歩	
⑦	A	"	芝地	明光	一二三五	一畝十四歩	全		一畝十四歩	
8	"	"	溜池	西ノ濱	一三一〇	三町四畝十六歩	全	内正八五年五月十三日官社東照宮境内へ編入	二反七畝二八歩〇一	
⑨	"	"	全	"	一三〇九	一反六畝十七歩	全	内一反四畝十七歩九合六勺右同断	一畝二九歩〇四	
10	B	"	風潮除地松林	"	一三〇八	一反五畝二十四歩	全	内四十二日天津湊九合八大正八年四月二日東照宮境内へ編入	四畝二〇歩	
11	B	"	全	出嶋	一五九一	四畝二十歩	全		一町七反三畝一八歩	
12	B	"	全	"	一六五六	一町七反三畝一八歩	全		一町七反三畝一八歩	
13	B	"	芦辺湖端	津屋	——	八町六反六畝二〇歩	全	可昭和三十六年四月二十一日ヨリ和山県告示第一二四号ヨリ解除スルコトヲ示シタルモノナリ		
14	C	"	芝地	和田	六九二	七畝三歩	明治三〇年六月十一日日本県告示第九十号以テ和可國ニ充用スルコトヲ示シタルモノナリ	内四畝二〇歩七〇明治四十三年一月ヨリ道路敷ニ編入	二畝一二歩三〇	
15	B	"	海岸地	市町前	一七一〇	一〇町四反六畝五歩	全		一〇町四反六畝五歩	
⑯	A	"	芝地	津屋	一〇五九	八歩	全		八歩	
17	"	"	葭生地	市町前	一六八一	二反七畝十三歩	全	外三反二一歩ハ二十一年十二月二十八日東照宮へ拂下	二反七畝三歩	
18	A	"	東照宮上地	西ノ濱	一三〇三	一町二十四歩	全	内三畝二五歩ハ大正八年五月十三日東照宮境内へ編入	三反二畝九歩	
19	A	"	天神社上地	全	一三〇七	三反二畝九歩	全		三反二畝九歩	
20	B	"	大相院上地	明光	一〇九一	一町三反八畝二歩	全	内十二坪ハ昭和二十二年五、六、七、八、九各月ヨリ妙見宮境内敷地トシテ編入	一町三反八畝一〇歩	
21	C	第三種	官林	天神山	一四九六	四町五反二畝十七歩	全		四町五反二畝十七歩	
22	C	全	東照宮上地	南山	七七四	二町六反三畝十六歩 廿四歩	全		二町六反三畝十六歩 廿四歩	
						一五六町三反七畝二十一歩				四〇町九反八畝三歩八七

〔地種〕～〔現在面積〕は和歌山県土整備部都市住宅局都市政策課蔵の表による)

- (1) 整理番号で○が付いているのは、明治一八年の和歌村の「公園設置請願」で公園区域としてリストアップされた場所であることを示している。
- (2) 使用規制欄でAとあるのは、明治32年の和歌公園規則の第三条で全面的に使用が禁止された場所であり、Bとあるのは、第五条で次に使用規制が厳しい場所として列挙されたところであり、Cは、第六条で最も規制がゆるやかな場所として列挙されたところであることを示している。空欄のところは、使用が想定されていなかった場所と思われる。

和歌公園関係年表

慶安期(1648～1652)	徳川頼宣、妹背山の整備(三断橋、観海閣など)
慶応2年(1866)8月7日	観海閣、暴風雨で崩壊
2年(1866)9月12日	再建に着手
3年(1867)9月3日	竣工
明治2年(1869)	廃仏毀釈、和歌の浦の雲蓋院など破却される
4年(1871)7月19日	廃藩置県
6年(1873)1月15日	太政官布告
6年(1873)	紀州東照宮、県社とされる
7年(1874)	和歌村々民、和歌祭再興
7年(1874)	旧紀州藩士、和歌の浦の雲蓋院跡に藩祖頼宣を祀る南龍神社建立
13年(1880)6月5日	御旅所、和歌村々民の要望により、紀州東照宮に返還される
16年(1883)	県、和歌公園設立を国に稟請 認められず
18年(1885)10月7日	和歌村、松本県令宛に公園設置請願書を提出
10月19日	和歌村、請願書を取上げる
22年(1889)7月と9月	暴風雨による大被害
23年(1890)	県、和歌公園設立を国に稟請 認められず
24年(1891)	風水害
25年(1892)5月9日	和歌村、和歌山市長宛に観海閣の修理と管理者認定要望
27年(1894)11月13日	県、和歌公園と岡公園設立を国に稟請
28年(1895)2月8日	国、岡公園設立を認可
28年(1895)11月27日	国、和歌公園設立を認可
28年(1895)12月28日	県、和歌公園設立
29年(1896)7月15日	和歌山県岡公園及和歌公園規則制定(県告示第88号)
32年(1899)3月17日	和歌公園規則制定(県告示第22号)
39年(1906)12月15日	和歌山県公園管理規則制定

指定の名勝になっているが、その殆どが明治期に和歌公園に指定されたところと重なっている。勿論、これは偶然のことではない。今日の和歌の浦における景観保全と管理をめぐる事態も、明治初期から明治20年代における和歌村々民の一連の景観保全活動とその成果である和歌公園設置を抜きにしては、語り得ないのである。確かに、和歌村々民の景観保全をめぐる活動を辿るだけでは、和歌の浦の景観そのものの把握と理解を全うさせることはできない。しかし、こうした歴史的具体相の次元からは、単に視覚上に現象する景観以上のもの、即ち、万人に開かれた“共楽の地”としての和歌の浦の景観と不可分に関係した諸行為の連鎖とそれが織りなす現実的で実存的な経験相が浮かび上がってくるのである。私たちが和歌の浦の景観を把握し理解しようとする際に不可欠とされるべき歴史的具体相の次元とは、このようなものであらうと考えられる。

〔謝辞〕

本稿の作成に当たり、和歌山県県土整備部都市住宅局都市政策課、和歌山県立文書館、和歌山城管理事務所、和歌川漁業協同組合、藤本清二郎和歌山大学教育学部教授、溝端佳則様、西本正治様には、資料の閲覧

に便宜を図って下さいましたこと、また、資料を提供して下さいましたことに心より御礼を申し上げます。

〔注〕

1. 田中正大氏の和歌の浦景観保全訴訟・法廷証言における和歌公園設置をめぐる言説は、深い造詣に裏打ちされたもので、貴重である。その全てをここに書き留めることはできないが、例えば、「まず国の方針として明治六年に太政官布告が出て、日本にもこれから公園というものを造るという方針が打ち出されました。和歌山では江戸時代以来ずっとこの景勝地を保全してきた紀伊藩が無くなり、保存の方針が絶えて、今まで保全されてきた景勝地がだんだん廃れていったということがあって、地元の和歌浦村民が公園にしてくれという申請をして縣も動いたんだと思います」(和歌の浦景観保全訴訟の裁判記録刊行会 1996年 49頁)という言説は、拙稿「パブリックガーデンとしての和歌の浦」(前号)に引き続いて、本稿でも導きの糸になっている。
2. 藤本清二郎氏の「江戸・明治期、和歌の浦の社会史々料—景観保全・水産業両立化への歩み—」(『紀州経済史文化史研究所紀要』第10号 1990年 和歌山大学紀州経済史文化史研究所 135～229頁)と「明治期の景観とその保護」(蘭田香融監修 藤本清二郎・村瀬憲夫編『和歌の浦 歴史と文学』和泉書

- 院 所収)がそれである。とくに前者に取められている「観海閣の保全と県立和歌公園の設置に関する史料」と「明治前期、和歌村の牡蠣・海苔養殖等に関する史料」は、明治初期～明治20年代における和歌村(村民)の景観保全活動を見る上で不可欠な一次史料の翻刻集であり、本稿における研究もこの翻刻集に依拠している。
3. 早くも9月12日には、城下町人に「観海閣再建御手伝御用掛」を申しつけるお触れが出されている。『和歌山市史 第5巻 近世史料Ⅰ』760～763頁
 4. 再建には困難も伴ったようである。『和歌山市史 第5巻 近世史料Ⅰ』760～763頁
 5. 「当時用掛り中手許ニ控へ置シモノヲ写シ取タルモノ」も参考資料として添えられた。この史料は、藤本清二郎 1990 (161～162頁)に掲載されている。問題となる再建費用の調達については、津田伊助以下9名の御用係総代名で、「早々普請ニ取建度奉存候」として、藩から「銀百貫目」を借りているのであるが、その際の言い分は、「勧誘銀」を募って必ず返済する(最終的には御用係一統で責任を持つ)というものであった。
 6. 太政官布告に関わる議論については、田中正大 1974、佐藤昌 1977に詳しい記述がある。
 7. 太政官布告と“共楽の地”としての和歌の浦(和歌公園)との関係についての検討は、大きなテーマになるが、今後を期したい。
 8. 日本三景に数えられる松島の公園設置は明治35年で天橋立の場合も明治38年のことである(丸山宏 1986)。嵐山も明治39年である。こうした点からは、和歌の浦の明治28年というのは、決して遅くない。太政官布告によって公園設置が制度化されたのであるが、それぞれの場所が公園となるには個別の事情が大きく作用している。とくに明治期の公園設置については、それぞれのケースを丹念に調べることが求められるが、和歌の浦(和歌公園)は、その重要性に比して、これまで十分な調査研究が行われて来なかったということになる。本稿は、この研究蓄積上の不足を補うことを課題としているが、その最初の一步に位置づけられているものである。
 9. 保勝会については、中島直人 2003、2006、水瀧あまな・藤岡洋保 1998を参照されたい。
 10. 何故に、和歌村(村民)は、和歌の浦の風致(景観)の保全・維持に粘り強く取り組むことになるのか、また、そうすることができたのか。このことの解明(理解)は、不可避の課題であるが、本稿では、まだ十分な議論をするための準備がない。
 11. 観海閣の修理問題で、和歌村は村費での修理を厭わなかったが、それには海苔養殖と牡蠣採取の利益の一定部分が村の財源として確保される仕組みがあったことによると思われる。毎年、村は海苔養殖場及び牡蠣採取場となる干潟を一括して県から借り上げ、村民(614世帯)はその中から一定の場所を抽選で引当て海苔養殖を行い、また、牡蠣採取が行われたと考えられるのであるが、海苔の品質管理や出荷も事実上村単位で行われるようになっていたと思われる。とす

- れば、利益の一定額が村に残されるようになっていた仕組みがあったとしても不思議ではない。
12. 和歌公園と岡公園の稟請書が同じ日付で国に出されているのは、興味深い。理由としては、これまで却下されてきた和歌公園の認可を得易くするために比較的認可が容易に得られると考えられた岡公園(天妃山)と抱き合わせにされたこと、更には、岡公園が和歌山城に隣接した地にあることから、和歌山城の払い下げ＝公園化に向けた布石にされたことが考えられる。とすれば、和歌公園設置にむけた動きが、和歌山県レベルでの公園設置を促したことになる。いずれにしても、和歌公園設置は、岡公園設置、更には明治34年の和歌山城公園設置に連動するものであったと考えられる。
 13. 明治27年の県議会での提案内容が、「和歌村全村ヲ画シ公園地区ト定メ」とされている点は、注目に値する。官有地と民有地とが混在する和歌の浦の特性に合わせたものと考えられるが、同時に、営造物公園としては散在型にならざるを得ないことに対して、元々一体的なものであることを主張するためのものであったとも考えられる。
 14. 和歌公園と岡公園の稟請書及び稟請書を受けての国の認可通知(稟請書と認可通知のそれぞれの写しが和歌山県庁に所蔵されている)の存在が確認できたことで、岡公園の場合にも国に稟請書が提出され、国の認可を経て公園として設置されたことが明らかになった。和歌公園と違って、岡公園の場合、地盤は国有地ではなく県有地(稟請するに当たって民間所有者から寄附を受けている)であったが、公園となることで地租が免除されることになることからやはり国に認可を求める稟請書が出されていたのである。岡公園に対する国の認可通知の日付は、明治28年2月8日であり、この認可通知を受けて県は程なく岡公園を設置する告示を出したと思われるが、写しも含めて告示が残されておらず、日付は不明である。ただ、明治28年度の予算が計上されていることから、同年4月1日までは告示が出されたとみてよからう。従って、明治29年に建立された「岡公園記」にある「二十七年ニ及び、県議始メテ官ニ請イテ弁天山ヲ以テ公園トナス」(翻字、読み下しは、江本英雄氏)という記載を元に、これまで岡公園の開設が明治27年とされてきたのは、(例えば『史跡和歌山城保存管理計画書(資料編)』で「27年(1894)4月1日 弁財天山を岡公園(7,762坪)として公開」されているなど)間違いということになる。因みにで、『和歌山県誌第一巻』では、「本県に於て県費を以て公園を経営するに至りしは、明治二十八年を以て始めとす。同年城東天妃山の地を引受け、招魂式費の残金三百九十九円十二銭を寄附金として受け、其地を岡公園と称し之を管理す。」(復刻版966頁)とある。
 15. 「岡公園記」には、「老松古柏深山ノ気アリ、奇花異草幽谷ノ美アリ。其ノ広以テ逍遙スベク、其ノ楽以テ盤桓スベシ。而シテ、前ニ古城ヲ臨メバ即チ封建將士尚武ノ形況ヲ思念スベク、左ニ岡山ヲ顧レバ即チ往古帝王右文ノ氣象ヲ欽仰スベシ。近ク記念ノ碑碣ヲ誦スレバ、即チ国家三百年養士ノ素アルヲ知ルベシ。即チ、斯ノ園ニ遊ぶ者ハ全テ、特ニ花晨

月夕、俯仰徘徊以テ養生スルニ非ズ、其ノ左右顧望ノ間ニ於テ、気ヲ養フ者モ亦尠ナカラズナリ。」(翻字、読み下しは、江本英雄氏のものの中島春三氏のもの(『和歌山公園および岡公園の植生等調査資料』〔和歌山市 1978年〕80頁)を参考にした)とあり、岡公園(天妃山)は、「四民有息の地」(“共楽の地”)である和歌公園(和歌の浦)とは、異なる性格づけが行われていることが分かる。

16. 天妃山には、明治12年に四役戦亡「記念碑」が建立され、記念式(招魂祭)が行われてきたが、岡公園となった後も、明治34年に和歌山公園(和歌山城)が設置され砂の丸で行われるようになるまで、毎年5月に招魂祭が行われた(『紀伊毎日新聞』の明治32年5月6日付記事、明治33年4月19日付広告、明治34年4月30日付広告、明治35年5月7日付記事、明治36年5月3日付広告参照)。

尚、天妃山における記念碑の建立と招魂祭については、『和歌山市史 第3巻 近現代』における関係箇所(「天妃山の整備と招魂祭」〔116～117頁〕)及び『和歌山市史 第8巻 近現代史料Ⅱ』における関係箇所(「四役戦亡記念碑建立につき広告」〔613～614頁〕、「四役戦亡記念碑維持法につき訴え」〔614～615頁〕、「四役戦亡記念碑側記」〔615～616頁〕)を参照されたい。

17. 『地盤国有ニ属スル公園ノ概況調』(内務大臣官房会計課編 1933年 復刻版 日本公園緑地協会 1972年)では、昭和7年度の公園収入は3793円、昭和8年度の公園経費は5881円となっている(185頁)。

【文献】

- 大浦由美 1998年 「戦前期における森林のレクリエーション利用と国有林—明治初期における『官有地公園』と官林との関係を中心に—」『業経済研究』44(1) 39～44頁
- 佐藤 昌 1977年 『日本公園緑地発達史(上)』都市計画研究所 史跡和歌山城保存管理計画策定委員会
- 1993年 『史跡和歌山城保存管理計画書(資料編)』
- 白幡洋三郎 1995年 『近代都市公園の研究—欧化の系譜—』思文閣
- 蘭田香融監修 藤本清二郎・村瀬憲夫編 1993年 『和歌の浦 歴史と文学』和泉書院
- 蘭田香融・藤本清二郎 1991年 『歴史的景観としての和歌の浦』自費出版
- 田中正大 1974年 『日本の公園』鹿島出版会
- 内務大臣官房会計課編 1933年 『地盤国有ニ属スル公園ノ概況調』(復刻版 日本公園緑地協会 1972年)
- 中島直人 2003年 「用語『風致協会』の生成とその伝播に関する研究」『都市計画論文集』日本都市計

画学会 No.38- 3 853～858頁

- 2006年 「昭和初期における日本保勝協会の活動に関する研究」『都市計画論文集』日本都市計画学会 No.41- 3 905～910頁

- 藤本清二郎 1990年 「江戸・明治期、和歌の浦の社会史々料—景観保全・水産業両立化への歩み—」『紀州経済史文化史研究所紀要』第10号 和歌山大学紀州経済史文化史研究所 135～229頁

- 丸山 宏 1986年 「近代天橋立の風致史—天橋立公園の成立—」『京都大学農学部演習林報告』58号 206～224頁

- 1994年 『近代日本公園史の研究』思文閣

水渡あまな・藤岡洋保

- 1998年 「古社寺法成立に果たした京都の役割」『計画系論文集』日本建築学会 第503号 203～210頁

- 米田頼司 2010年 『和歌祭—風流の祭典の社会誌—』帯伊書店

和歌山県庁蔵

- 1894年A「和歌公園設置稟請」(写し)

- 1894年B「和歌公園沿革(「和歌公園設置稟請」添付資料)」(写し)

- 1894年C「岡公園設置稟請書」(写し)

- 1895年 「公園設置許可指令書」

- 1895年 「和歌山市ニ公園設置稟請ニ対シ許可並注意ノ件」(写し)

- 年不詳 「和歌公園沿革」

- 年不詳 「和歌公園地区一覧表」

和歌の浦景観保全訴訟の裁判記録刊行会

- 1996年 『よみがえれ和歌の浦—景観保全訴訟記録—』東方出版

和歌川漁業協同組合蔵

- 年不詳 『(牡)蠣海苔漁業其他必要書類留：明治五年六月より』

- 和歌山県 1914年 『和歌山県誌第一巻』(復刻版 1970)名著出版

和歌山県議会事務局編纂

- 1970年 『和歌山県議会史 第1巻』和歌山県議会 発行

和歌山市史編纂委員会編纂

- 1975年 『和歌山市史 第5巻 近世史料Ⅰ』

- 1978年 『和歌山市史 第7巻 近現代史料Ⅰ』

- 1979年 『和歌山市史 第8巻 近現代史料Ⅱ』

- 1990年 『和歌山市史 第3巻 近現代』

資料 1

公園地設置ヶ所左ニ記ス (明治18年公園設置請願書添付)	
第三百九拾壹番字鶴立嶋坪	秋葉社敷地
一民有宅地壹段九畝六歩	村 中 持
第四百廿四番字全坪	
一民有宅地四段貳畝六歩	羅 漢 寺 持
第千五拾七番字津屋坪	
一民有畑地貳拾六歩	奥野 直行
第千五拾八番字全坪	
一民有宅地四畝七歩	東清右衛門
第千五拾九番字全坪	
一芭蕉碑鋪八歩	官 有 地
第千六拾番字津屋坪	
一民有宅地貳畝拾六歩	貴志フクエ
第千六拾番字全坪	
一民有宅地拾九歩	藪 清一郎
第千六拾壹番字全坪	
一官地三畝貳歩	官 林
第千六拾二番字全坪	
一川添官地四畝八歩	右 全
第千六十三番字全坪	
一宝塔境内三畝拾歩	官 有 地
第千六十四番字全坪	
一妹背山九畝拾歩	官 林
第千六十五番字全坪	
一鏡山貳段三畝廿歩	右 全
第千六十六番字全坪	
一境内三段八畝貳歩	玉津島杜持
第千六十七番字全坪	
一奠供山四段七畝壹歩	官 林
第千貳百廿三番字明光坪	
一川添拝借地九歩	官 有 地
第千貳百廿五番字全坪	
一芝地壹畝拾四歩	右 全
第千三百零番字西ノ浜	
一南龍社境内壹町九畝廿貳歩	官 有 地
第千三百貳番字全坪	
一東照社境内壹町貳畝拾七歩	右 全
第千三百六番字全坪	
一天満社境内五段貳畝拾壹歩	右 全
第千三百九番字全坪	
一溜池壹段六畝拾七歩	右 全
第貳百四十八番字金山坪	
一円珠院境内貳段七畝六歩	右 全
海岸波戸場東詰ヨリ字切レ戸取合迄	
一海岸空地五段三畝拾歩	右 全
計八町六段五畝三歩	

内訳

民有地	六段八畝歩
官有地	壹町四段貳畝廿貳歩
全社寺地	三町三段三畝八歩
全溜池	三町貳段壹畝三歩

資料 2

和歌公園設置稟請 号外 公園設置及官有地ヲ公園ニ充用ノ儀ニ付稟請	
--	--

本縣下海部郡和歌村ハ山水幽雅、風光明媚ニシテ其名四方ニ聞ヘ頗ル稀有ノ勝区タリ殊ニ在昔三帝ノ蹕ヲ此地ニ駐メサセ給ヒシ以來名巨卿相繼テ遊觀シ隨テ樓台起リ靈塔建テ神社仏閣モ亦觀ノ美ヲ尽シ遠近般庶ノ来遊陸続トシテ其踵ヲ接シ其勝区タル陸前ノ松島丹後ノ天橋安芸ノ巖島等並ニ称シテ相讓ラサルハ別紙沿革略記ニ詳悉セルカ如シ然ルニ時勢ノ變遷ト共ニ其蹟漸ク荒廢ニ赴キ今ニシテ空ク湮滅ニ帰セシムルノ恐アリ此如キハ実ニ終古ノ遺憾ニシテ速ニ其保存ノ方法ヲ計画セサルヘカラサルノ主因タリ又觀海閣ノ如キハ縣有財産ニシテ之ヲ保存スルノ必要アリ其他妹背山、鏡山、奠供山、望海樓趾、天神山、権現山、等ノ如キ登眺及遊覽ニ必須ナル地ハ多ク皆上地官林ニ属シ衆庶ノ自由ニ之ニ立入り難キ牽制アリ其不便ヲ感スルコト亦少ナシトセス況ンヤ今後紀和、紀泉等ノ鉄道貫通スルニ至ラバ京阪其他四方遊覽ノ客益増加スルハ勿論平安奠都祭及四国勸業博覽會ノ際ニ在ラハ諸國ノ実客勝地ヲ巡遊シ而テ此地ニ輻湊スルハ亦疑ヲ容レサルニ於テヲヤ既ニ此勝区ヲ保存修理スルノ必要スノ如ク顯然タルニ於テハ縣ノ公園ヲ設ケ之ニ編入シ地方税經濟ヲ以テ之ヲ保持スルノ適當ナルヲ認メ仍チ縣會ニ諮問セシメ大多數ヲ以テ可決シタリ就テハ別紙図面区画ノ如ク公園ヲ設置シ及仕訳書記載ノ官有地ヲ公園ニ充用ノ義速ニ御許可相成度關係書類相添此段稟請候也

明治廿七年十二月十三日

和歌山縣知事 沖守固

内務大臣宛
農商務大臣宛

資料 3

岡公園設置稟請書 明治貳拾七年十二月十三日 号外 内務大臣宛	
--------------------------------------	--

和歌山ハ戸数壹万參千余人口五万五千余ノ一大市街ニシテ未曾テ公園ノ設ナク其不便ヲ感スルコト一日ニアラス然ルニ其天妃山ハ西南戦死者ノ紀念碑ヲ建設シ地位城ノ東南ニ方リテ高邱ヲ占メ琪樹恠巖相交錯シテ頗ル雅致幽趣ヲ極メ春秋ノ佳時ニ会スレハ衆庶皆来テ茲ニ遊息シ宛然公園ノ実ヲ備ヘ居リ候場所ニシテ今般其地所等ノ持主共ヨリ公園ニ寄附ノ義申出矣ニ付之ヲ縣會ニ諮問矣處至極適當ノ地ナルニヨリ縣ノ公園トシテ地方税經濟ヲ以テ維持然ルヘキ旨可決致候間茲ニ公園ヲ新設シ別紙実側図ノ地所ヲ画シ公園ニ編入ノ御許可相成度關係書類添ヘ此段稟請候也

明治廿七年十二月十三日

和歌山縣知事 沖守固

内務大臣宛

資料 4

公園設置許可指令書

内務局指令甲第六七号

和歌山県

客年十二月十三日付号外稟請公園設置ノ件聞届ク

明治二十八年二月八日

内務大臣子爵 野村靖

資料 5

和歌山市ニ公園設置稟請ニ対シ許可並注意ノ件

内務省指令甲第六四号

和歌山県

客年十二月十三日号外稟請公園設置及官有地ヲ公園ニ充用ノ件ハ社寺境内地ヲ除クノ外聞届候、尤公園ニ編入ノ地ハ名勝及風致上離権スルヲ得サルモノニ付他日若シ公園ノ名称ヲ廃スルコトアルモ県郡市町村等へ無代下附難相成儀ニ候条公園設置区域ニ変更ヲ生シタル点トモ併テ縣会ニ諮問シ予メ同会ノ意見確定ノ上ニアラサレバ公園開設不相成儀ト心得ヘシ

明治二十八年十一月二十七日

内務大臣子爵 野村靖

農商務大臣子爵 榎本武揚

資料 6

和歌山縣岡公園及和歌公園規則

第一章 土地家屋使用

第一條 公園ニ於テ地所建物ノ使用ヲ許スハ當廳ニ於テ衆庶ノ僭樂ニ供シ若クハ遊歩者ニ便益ヲ與フヘシト認ムル者ニ限ル可シ

第二條 公園ニ於テ地所ヲ使用セントスル者ハ其位置坪數及營業ノ目的ヲ詳記シ圖面ヲ添ヘ（建物ヲ設置セントスル者ハ地圖ノ外建物ノ構造坪數ヲ記シタル圖面ヲ添ヘシ）公園所在地ニ於テ公民權ヲ有スル者貳名ヲ保證人トシ當廳ニ願出許可ヲ受クヘシ

第三條 地所建物使用期限ハ五ヶ年以内トス但滿期繼續出願スルコトヲ得

第四條 使用ノ許可ヲ得タル者ハ其翌日より三十日以内ニ營業ノ諸設営ニ着手シ成功ノ上ハ其旨當廳へ届出檢査ヲ受クヘシ

第五條 使用地内ト雖トモ其家屋ノ増築又ハ模様替其

他新規ノ造營ヲ爲サントスルトキハ圖面ヲ作り當廳ニ願出許可ヲ受ケ成功ノ上ハ其旨届出檢査ヲ受クヘシ

第六條 使用地内ハ勿論其周圍ト雖トモ不潔ナラサル様常ニ掃除ヲナシ且塵埃ノ飛散セサル様時々浄水ヲ灑キ又降雪ノトキハ之ヲ取除クヘシ

第七條 使用地内ニ在來ノ草木ハ之ヲ保護スヘシ伐採植換又ハ増植セントスルトキハ當廳へ願出許可ヲ受クヘシ

第八條 使用地ハ之ヲ他人ニ轉貸スルヲ禁ス

第九條 使用地内ニアル建造物ノ全部又ハ一部ヲ取り除キタルトキハ其旨當廳ニ届出ヘシ

第十條 使用地ニ設クル一切ノ建造物不潔又ハ不体裁ニシテ當廳ニ於テ公園ノ美觀ヲ損スルモノト認ムルトキハ修繕又ハ改造ヲ命スルコトアルヘシ但本文命令ヲ受ケタル日より七日以内ニ着手セサルトキハ該建造物ノ全部又ハ一部ノ取拂ヲ命スヘシ

第十一條 當廳ヨリ建物ノ取拂ヲ命セラレ又ハ使用地ヲ返納する者ハ其翌日より三十日以内ニ一切ノ建物等ヲ取拂ヒ地所ヲ元形ニ復シ其旨當廳へ届出檢査ヲ受クヘシ若シ之ヲ怠ルトキハ當廳ニ於テ施行シ其費用ヲ辨償セシムヘシ

第十二條 使用期限中ト雖トモ公園改良上必要ト認ムルトキハ九十日以前ニ於テ之ヲ返地ヲ命スルコトアルヘシ但該使用地内ニ在ル建造物ハ本文期限内ニ取拂ヲナスヘシ若シ之ヲ怠リタルトキハ前條ノ手續ニ依ル

第十三條 使用地ニアル建造物ノ賣買讓與ヲナストキハ双方連署シ當廳ニ願出許可ヲ受クヘシ但代替ノトキハ相續人ヨリ届出ヘシ

第十四條 建造物取拂又ハ返地ヲ命シタル場合ニ於ル損害ハ地所使用者ノ負擔トス

第十五條 使用地内ニアル建物等ニ番人ヲ置クコトヲ得ヘシト雖トモ婦女ヲ宿泊セシムルコトヲ禁ス但特許ヲ得タルモノハ此限ニアラス

第十六條 使用地及建物ノ周圍ニ牆壁等境界ヲ設ケ又ハ衣類其他ノ物品ヲ干燥スルコトヲ禁ス

第十七條 蘆荇ノ類ハ規定ノ場所ノ外山林道路池溝等ニ棄ツルコトヲ禁ス

第十八條 糞尿其他ノ穢物ハ日出ヨリ日没マテ運搬スルヲ禁ス

第十九條 使用地内建造物等ハ臨時檢査ヲナスコトアルヘシ

第二十條 本規則ニ依リ土地建物ヲ使用スル者ハ別ニ定ムル所ノ使用料ヲ納ムヘシ

第二十一條 公園所有ノ建造物ヲ使用セントスルモノモ亦前各條ヲ準用スヘシ

第二十二條 第四條乃至第八條第十三條第十五條乃至第二十一條ニ違背ン督促又ハ制止二回以上ニ及フトキハ土地又ハ建造物返還ヲ命スヘシ但建造物取拂期限ハ

第十一條ノ手續ニ依ル

第二章 寄附

第廿三條 木石其他ノ物件ヲ寄附セントスルモノハ當廳ニ願出許可ヲ受クヘシ

第廿四條 前條ノ場合ニ於テハ其位置等總テ當廳ノ指揮ニ從フヘシ

該物件ハ相當ノ保護ヲ加フヘシト雖トモ天災時變ノ爲メ毀損シタル場合ニ於テハ當初ノ出願人又ハ相續人ノヲ修補セサルトキハ適宜處分スヘシ

第廿五條 園内改良上必要ト認ムルトキハ第廿三條ノ建造物ハ當廳ニ於テ其位置ヲ變更スルコトアルヘシ

第廿六條 在來ノ建造物ハ第廿四條二項及第廿五條ヲ適用ス

第三章 園内揭示

第廿七條 園内遊歩ハ隨意タリト雖モ圍ヒ又ハ制禁ノ建札アル内ニ立入ルヘカラス

第廿八條 荷車其他遊歩ヲ妨クヘキモノ園内ニ入ルヘカラス

第廿九條 牛馬及人力車ハ制札以内ニ曳入ルヘカラス

第三十條 車馬ハ指定セル場所ノ外ニ置クヘカラス

第卅一條 草原并ニ腰掛等ニテ睡眠スヘカラス

第卅二條 土手柵及樹木ニ登リ又ハ木石ヲ投クヘカラス

第卅三條 魚鳥ヲ捕ルヘカラス

第卅四條 草木ヲ折取り又ハ木ノ實ヲ採リ落チタル枝葉ヲ拾ヒ又ハ土石ヲ堀取ルヘカラス

第卅五條 特ニ許可ヲ得タル者ノ外諸藝ヲ演スル者立入ルヘカラス

第卅六條 屑買ヒ又ハ木拾ヒノ者立入ルヘカラス

第卅七條 園内ニアル割烹店小憩所又ハ屋臺店ノ外諸品ヲ賣ルコトヲ許サス

第卅八條 猥りニ焚火ヲナシ又ハ烟火ヲ揚クヘカラス

第四章 附則

第卅九條 岡公園ニ於テ記念招魂式執行當日ニ限り公衆ノ遊歩ヲ制限スルコトアルヘシ

第四十條 此規則ハ明治廿九年七月十九日ヨリ施行ス

資料 7

和歌山縣告示第二十二號

和歌公園規則別紙之通相定ム

明治三十二年三月十七日 和歌山縣知事野村政明

(別紙)

和歌公園規則

第一章 公園取締

第一條 公園内ニ於テ左ノ行爲アルヘカラス

一樹木ヲ折リ若ハ枝葉ヲ拾ヒ又ハ土石ヲ堀取ル事

二車馬ヲ禁スル区域内ニ之ヲ入ル事

三魚鳥ヲ捕ル事

四樹木ニ登リ又ハ木石ヲ投クル事

五塵芥ヲ放棄スル事

六猥りニ焚火ヲ爲ス事

第二條 許可ヲ得シテ公園内ノ土地建物ヲ使用スヘカラス

第二章 土地建物使用ノ分界

第三條 公園ノ内左ノ場所ハ風致又ハ浪除ニ關係アルヲ以テ一切使用ヲ許サ、ルモノトス

字西ノ濱千三百四番

一東照宮上地官林三町四反五畝拾七步

字西ノ濱千三百三番

一東照宮上地官林壹町貳拾四步

字西ノ濱千三百七番

一天神社上地官林三反貳畝九步

字津屋千六十四番

一海禪院上地官林^(妹脊山)九畝拾步

字津屋千六十二番

一海禪院上地官林^(松原)四畝八步

字明光千二百二十五番

一芝地壹畝拾四步

字津屋千五十九番

一芝地八步

字津屋千六十五番

一玉津嶋上地官林^(鏡山)貳反三畝貳拾步

第四條 公園ノ内左ノ場所ハ第六條ノ制限ニ依リ一ヶ所乃至三ヶ所露店設置ノ爲使用ヲ許スヘシ其使用期限ハ五年以内トシ滿期繼續願出ルコトヲ得但一ヶ所五坪以内トス

字明光ノ坪千九十一番

一大相院上地官林壹町三反八畝貳拾貳步^(山ノ頂上ヲ除キ一ヶ所)

字市町前千七百十番

一海岸地拾町四反六畝五步^(三ヶ所以内)

字出島千六百五十六番

一風潮除松林敷地壹町七反三畝拾八步^(三ヶ所以内)

字出嶋千五百九十一番

一風潮除松林敷地四畝貳拾步^(三ヶ所以内)

字西ノ濱千三百八番

一風潮除松林壹反五畝貳拾四步^(一ヶ所)

字津屋千六十七番

一奠供山官林四反七畝壹步^(山ノ頂上ヲ除キ一ヶ所)

字和田六百八十六番

一養珠寺上地官林六反七畝貳步^(三ヶ所以内)

字 無番

一芦邊潮溜八町六反六畝貳拾步^(不老橋詰ヨリ以南道路ニ沿ヒ掛ケ作り建物設置ニ限ル)

第五條 公園ノ内左ノ場所ハ第六條ノ制限ニ依リ使用ヲ許スヘシ其使用期限ハ十ヶ年以内トス但滿期繼續願出ルコトヲ得

字津屋千六十一番

一海禪院上地三畝貳拾三步

字和田六百八十三番

一養珠寺上地官林壹反三畝貳十壹步

字和田六百八十五番

一養珠寺上地官林貳反三畝七步

字和田六百九十二番

一芝地七畝三步

字西ノ濱千三百五番

一天神社上地官林拾五町四反七畝拾三步

雜賀村大字西濱字天神山千四百九拾六番

一天神社上地官林四町五反貳畝拾七步

難賀村大字關戸字南山七百七十四番

一東照宮上地官林貳町六反三畝十六步

第六條 前二條ノ場所ヲ使用セシムルハ衆庶ノ僭樂ニ供シ若ハ遊歩ノ便ヲ圖ル目的ヲ以テ經營スルモノニシテ左ノ條件ヲ遵守スルモノニ限ルヘシ

一使用ヲ許シタル場所ト雖モ建設物又ハ露店ノ敷地以外ハ衆庶ノ觀覽遊歩ハ自由タルヘキ事

二使用地ノ周圍ニ墻垣ヲ設ケサル事

三特ニ許可ヲ得ルニアラサレハ地形ヲ變換シ樹木ヲ移栽又ハ伐採若ハ新ニ樹木ヲ栽植セサル事

四許可ヲ得テ栽植シタル樹木ハ使用地返還ノ際ト雖之ヲ他ヘ移栽セサル事

五使用地ハ之ヲ他人ニ轉貸セサル事

六使用許可ノ年限中ト雖縣ニ於テ必要アルトキハ何時ニテモ返還スル事

七使用地内ハ常ニ清潔ニ掃除スル事

第七條 公園内ノ地所使用ノ許可ヲ得タルモノハ其翌日ヨリ三十日以内ニ於テ經營ニ着手シ其旨縣廳ヘ届出竣工ノ上ハ更ニ届出檢査ヲ受ヘシ

家屋ノ増築又ハ模様替其他新規ノ經營ヲ爲サントスルトキハ其許可ヲ受ヘシ許可ノ後届出ノ手續ハ前項ニ依ル

使用地内ノ建物ノ全部又ハ一部ヲ取除キタルトキハ其旨縣廳ヘ届出ヘシ

第八條 土地使用者第六條ノ條件ニ違背シ督促又ハ制止ヲ受ルモ尙之ヲ遵守セサルトキ若ハ縣ニ於テ必要アルトキハ建物ノ取拂ヲ命シ又ハ使用地ヲ返還セシムヘシ

第九條 使用地ノ建設物ヲ賣買讓與スルトキハ先以テ双方連署縣廳ニ願出許可ヲ受ケ代替リノトキハ相續人ヨリ届出ヘシ

前項賣買又ハ讓與ノ許可ヲ得タルトキハ買受又ハ讓受人ヨリ更ニ其土使用地ノ許可ヲ請フヘシ其使用料ハ先キニ許可ヲ得タルモノノ納メシ額ヲ下ルコトヲ得ス

第十條 建設物取拂又ハ返地ニ關スル一切ノ損失ハ使用者ノ負擔トス

第十一條 公園内左ノ場所ハ従前ノ慣行ニ依リ又ハ新ニ生産物利用ノ爲使用ヲ許可スルコトアルヘシ其年限及使用ノ制限等ハ第五條以下ノ規定ヲ準用ス
字 無番

一芦邊潮溜八町六反六畝貳拾步

字西ノ濱千三百九番

一御手洗池壹反六畝拾七步

字西ノ濱千三百十番

一御手洗池參町四畝六步

字市町前千六百八拾二番

一葭生地貳反七畝貳拾三步

第十二條 公園内左ノ建物ハ保護上必要ノ爲二坪以内ニ限り使用ヲ許スコトアルヘシ其使用ノ年限等ハ第五條以下ノ規程ヲ準用ス

字津屋

一觀海閣

前項ノ使用ノ許可ヲ得タルモノハ觀海閣保護ノ責ニ任スヘシ

第三章 使用願ノ手續

第十三條 公園内ノ地所等ヲ使用セントスルモノハ左ノ要項ヲ詳具シ和歌山市若ハ海草郡ニ於テ公民權ヲ有スル者二名ノ保證ヲ得テ和歌浦町役場海草郡役所ヲ經テ縣廳ヘ願出ヘシ但保證人ノ公民權調書ヲ添付スヘシ

一使用ケ所ノ位置坪數及使用經營ノ目的ヲ詳具スヘシ

二使用ケ所ノ圖面ヲ添フヘシ

三建物又ハ露店ヲ設置セントスルモノハ地圖中ヘ其建物ノ位置ヲ示シ別ニ建物ノ坪數構造ヲ記シタル圖面及其設計書ヲ添付スヘシ

四地所使用ニ附帶シ地形ヲ變換セントスルモノハ原形及變換後ノ地形ヲ記シタル圖面ヲ添付スヘシ

五地所使用ニ附帶シ樹木ノ移栽又ハ伐採若ハ植繼ヲ爲サントスルトキハ其旨趣ヲ詳記スヘシ

第十四條 使用願ニハ各自相當ト認ムル使用料金ヲ明記スヘシ但其使用料及使用ノ方法又ハ建設物ノ構造不適當ト認ムルモノハ許可セサルヘシ

第十五條 同一ノ地所ニ對シ數人ノ出願アルトキハ其使用料高價ニシテ使用ノ方法又ハ建設物ノ構造適當ナルモノニ許可スヘシ

第十六條 從來使用ヲ許シタル場所ニシテ現使用者ニ於テ繼續ヲ願出ルトキハ先取權ヲ與フヘシ但其使用料不適當ト認ムルトキハ此限ニアラス

第十七條 使用願ヲ差出スヘキ期日ヲ定ムル必要アルトキハ別ニ告示スヘシ

附 則

第十八條 從來使用ヲ許シタルモノハ其年限中之ヲ据置キ年限滿期ニ至リ此規則ニ據ルモノトス但從來使用ノ目的第六條ノ條件ニ適合セサルモノハ之ヲ許サスト雖既設ノ建碑又ハ既定ノ耕作地ニ限り其慣行ヲ襲クコトヲ得

第十九條 此規則ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

資料 8

公園管理規則 明治三十九年十二月十九日縣令第七十號

公園管理規則縣會ノ議決ヲ經左ノ通相定ム

但明治二十九年^{七月}告示第八十八號同三十二年^{三月}告示第二十二號同三十四年^{三月}告示第六十四號ハ本規則施行ノ日ヨリ廢止ス

公園管理規則

第一條 本則ニ於テ公園ト稱スルハ岡公園、和歌山公園、和歌公園ヲ指稱ス

第二條 公園ニ關スル經濟ハ各公園特別會計トス

第三條 公園ハ慣行ニ依ルモノ、外其性質ニ反シテ使用セシムルヲ得ス

但其用法ニ於テ公園經營上支障ナシト認ムルモノハ此限ニアラス

第四條 公園ノ土地水面ヲ區劃シ又ハ建物等ヲ特ニ使用セントスル者ハ知事ノ許可ヲ受クヘシ

第五條 前條ニ依ル土地水面又ハ建物等ノ使用期限ハ其用法ヲ斟酌シ五箇年以内ニ於テ知事之ヲ定ム但期限滿了後更新スル事ヲ妨ケス

第六條 土地水面又ハ建物等ノ使用許可ヲ受ケタルモノハ之レカ用法ヲ變更セントスルトキハ更ニ許可ヲ受クヘシ

第七條 土地建物等ノ使用者ニ於テ其土地建物ニ定着スル工作物ヲ設ケ又ハ之レカ形狀物質ニ變更ヲ生スヘキ行爲ヲナサントスルトキハ知事ノ許可ヲ受クヘシ

使用權消滅ノ際ハ十日以内ニ原狀ニ回復スヘシ
但使用者ノ申出ニ依リ之レカ義務ヲ免除スルコトアルヘシ此場合ニ於テハ縣ハ無償ニテ定着物ノ所有權ヲ取得ス

第八條 使用者ニ於テ前條第二項ノ期間内ニ原狀ニ回復セサルトキハ其工作物ノ所有權ヲ拋棄シタルモノト見做シ縣ニ於テ之レヲ取得シ若ハ縣ノ命シタル第三者ノ代執行費用ヲ負擔セシムルコトアルヘシ

第九條 土地建物ノ使用者ハ善良ナル注意ヲ以テ之レヲ保管スヘシ若シ故意又ハ過失ニ因リ損害ヲ生セシメタルトキハ縣ノ撰擇ニ從ヒ原狀回復又ハ損害賠償ノ責ニ任セシムルモノトス但義務ノ履行ニ付テハ第七條第二項及第八條ノ規定ヲ準用ス

第十條 建物使用者ハ自費ヲ以テ使用及保存ニ必要ナル修繕ヲナスコトヲ要ス

第十一條 縣ニ於テ必要ト認ムルトキハ何時ニテモ使用ヲ禁シ又ハ制限スル事アルヘシ前項ノ場合ニ於テ使用者ハ損害ヲ被ルコトアルモ縣ハ賠償ノ責ニ任セス

第十二條 左ノ場合ニ於テハ何時ニテモ使用許可ヲ取消スコトヲ得

- 一 第六條第七條第一項ニ違背シタルトキ
- 二 使用料ヲ滞納シタルトキ

三 風致ヲ損シ若ハ風紀ヲ紊スカ如キ處アリト認ムヘキ行爲アリタルトキ

四 縣ニ於テ必要ト認メ命令シタル事項ヲ遵守セサルトキ

第十三條 本則施行ニ關シ必要ナル規定ハ知事之レヲ定ム

第十四條 従前土地又ハ建物等ノ使用者ハ本則施行ノ日ヨリ一箇月以内ニ更ニ許可ヲ受クヘシ

第十五條 本則ハ明治四十年一月一日ヨリ施行ス

公園管理規則施行細則 明治三十九年十二月十九日縣令第七十一號

公園管理規則施行細則左之通定メ明治四十年一月一日ヨリ施行ス

公園管理規則施行細則

第一條 公園規則第四條ニ依リ公園内土地建物等ノ使用許可ヲ受ケントスル者ハ第一號書式ニ準シ使用ノ目的其區域及工作物ノ模様圖面并ニ仕様書ヲ添ヘ願出スヘシ

第二條 公園内ニ於テ建設スル家屋ニハ牆壁ヲ設クル事ヲ得ス若シ已ヲ得サル場合ニ於テハ其事由ヲ具シ許可ヲ受クヘシ

第三條 使用者ハ其費用ヲ以テ使用區域ハ勿論其周圍ノ掃除ヲ爲シ常ニ清潔ニ保持スヘシ

第四條 公園使用ノ許可ヲ得タルモノニシテ其許可ノ日ヨリ三十日以内ニ經營ニ着手セス又ハ着手ノ日ヨリ一年以内ニ成功セサルモノハ使用許可ノ効力ヲ失フモノトス但特別ノ事情アルモノニシテ豫メ許可ヲ得タル場合ハ此限りニ非ス

第五條 許可若クハ命令ヲ受ケ工作物ノ新設増設變更修繕等ヲ爲ストキハ五日以前ニ落成ノ上ハ五日以内ニ其旨届出ヘシ

第六條 使用區域内在來ノ竹木草花等ハ是ヲ保護シ手入ヲナス外伐採移植セントスルトキハ許可ヲ受クヘシ

第七條 使用物ハ之ヲ他人ニ轉貸スルヲ得ス

第八條 使用區域内ニハ使用者其家族及雇人ノ外宿泊セシムルヲ得ス但旅館ハ此限ニ非ス

第九條 使用區域内外ヲ問ハス溝渠ヲ壅塞シ汚泥ヲ停滯セシムルヲ得ス

第十條 使用許可期間内ニ土地建物ヲ返還セントスル者ハ第二號書式ニ依リ願出許可ヲ受クヘシ

第十一條 私有工作物ノ所有權ヲ移轉シタルトキハ第三號書式ニ依リ使用權ノ返換ヲ願出ヘシ家督相續ノ場合ニ於テハ相續者ヨリ届出ルヲ要ス

第十二條 公園使用者ニ於テ本籍住所ヲ移轉シタル時ハ三日以内ニ届出ヲナスヘシ

第十三條 公園内ニ於テ左ノ行爲ヲ禁止ス

- 一 魚鳥及鈴虫、松虫ヲ殺傷若クハ捕獲スル事
- 一 樹木及石垣ニ上リ若クハ塵芥瓦礫ノ類及汚穢物ヲ

投棄スル事

一草木及果實ヲ採取シ又ハ土石ヲ採掘シ又ハ枝葉ヲ拾收スル事

一猥リニ焚火ヲナシ火技ヲ演シ其他危險ノ遊戲ヲナス事

一他人ノ遊歩ヲ妨害スル事

一諸品ヲ行商スル事但園内居住者ニ賣込ヲナスハ此限りニ非ス

一制禁ノ立札アル場所ニ立寄り若ハ通行スル事

一指定場所外ニ車ヲ置ク事

一前各號ノ外風致ヲ害スル行爲アル事

第十四條 知事ニ提出スヘキ願届ハ凡テ公園取締ヲ經由スヘシ

公園使用料徴收細則 明治四十二年一月二十八日
縣令第九號

明治三十九年十二月縣令第七十四號公園使用料徴收細則内務大臣ノ許可ヲ受ケ左ノ通改正ス

公園使用料徴收細則

第一條 公園ノ土地水面又ハ建物ノ使用許可ヲ受ケタルモノハ本則ニ依リ使用料ヲ徴收ス

第二條 使用料ハ左ノ範圍内ニ於テ知事之ヲ定ム
常時使用ノモノ

土地	一坪ニ付 一ケ年	金五錢以上壹圓以下
----	-------------	-----------

水面	同	金五厘以上五拾錢以下
----	---	------------

建物	同	金五拾錢以上貳圓以下
----	---	------------

臨時使用ノモノ

土地	一坪ニ付 一日	金壹錢以上拾錢以下
----	------------	-----------

水面	同	金五厘以上五錢以下
----	---	-----------

建物	同	金五錢以上貳拾錢以下
----	---	------------

第三條 土地水面又ハ建物ノ使用料ニシテ前條ニ依リ難キ場合ハ縣參事會ノ議決ヲ經テ之ヲ定ム

第四條 慈善ノ爲又ハ營利ノ目的ニアラスシテ使用スルモノハ知事ニ於テ使用料ヲ免除スルコトヲ得